
紅の偽王と黒の偽従者

並木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅の偽王と黒の偽従者

【Nコード】

N3710T

【作者名】

並木

【あらすじ】

不運なこれまでの日常が突如終わりを告げた。と思ったら、不運なのはそのままにもっと混沌とした状況に。喋る黒猫が現れ、強制トリップ？そして、幼馴染のイケメン大魔王が並行世界の王だそうで。え、俺、従者！？

軽いBLが入る予定。苦手な方は、ご注意下さい。

設定と登場人物まとめ

簡単な設定と主要登場人物まとめ。
随時更新します。

かやまるいち
嘉山 琉吉

主人公。

黒髪黒眼の十七歳。

性格は普通の部類に入るが、窮地に立たされるほど冷静になる。対処も的確にすることができる。

しかし反対に、軽いハプニングには弱い。

銃の扱いが得意。銃の知識もそれなりにはある。

巻き込まれ人生。そのほとんどが零矢。そのためか、諦め癖がある。

容姿も賢さも、上の下。一般よりはそこそこ良いレベル。勉強は努力して、上の上。

両利き。零矢に甘い。

「えー…、人類？…知り合いとその他」

ルイチリオルムステッド

《トップエイド最親側近》 《トゥーハンドガンナー漆黒の二丁射撃手》

元帥にして先鋒と参謀を勤めている。王であるレイの幼馴染。どんな銃でも使える、銃の使い手。

容姿は琉吉と全く同じ。十九歳。

みやそのれいや
宮園零矢

赤髪で赤眼の十七歳。

性格は我侗でマイペース。自我、プライドが高い。世界は自分中心に回っている。

けれど親しい人であればそこそこ気を使ったり、優しい一面もあると言えはある。

しかし、自分が敵と見なした者（物）には、情も何も無い。その他に関しては、無関心。

容姿と賢さは、上の上。運動もできないものはない。

しかし、性格に難有り。

琉吉がいなくなったら、因果が崩壊する。

「人類は、俺と琉吉とその他に分けられる。その他を細かく分けるなら、味方と敵とその他だ」

レイ＝ファードイナンド

《王》 《紅蓮の強き賢王》

革命により王となる。自らを大元帥とし、戦いにも参加する。

民衆からの支持は高いが、貴族とプロシットを敵に回している。

戦いの際は、剣と魔法を使う。

容姿は零矢と全く同じ。十九歳。

ウィルフレッドⅡオドワイヤー

《親側近》インティメート

黒髪金眼の二十四歳。獣人で、黒い猫耳が生えている。

革命時からレイに仕えていた側近。優秀な参謀。何故かいつも黒縁眼鏡をかけている。

落ち着いており常識人だが、少し外れたところがある。常時毒舌。特にセシルに対しては酷い。

ルイチとは一日に三回喧嘩をする仲。

容姿、賢さともに上々。

運動神経も同じく。けれど、戦闘力は不明。魔法は使える様子。

敬語がたまに不自然、可笑しい。

「人類、ですか？分けるといいうのは、何を基準に分けるのですか？」

セシルⅡラヴァーティ

《親側近》インティメート 《短剣使いの毒魔士》ボイスンダガーコントローラー

橙に近い金髪、淡い緑眼の十五歳。

見た目は実際の歳より大人っぽいが、中身は歳相応、又はそれ以下。革命時からレイに仕えていた側近。参謀なのだが、あまり賢いというわけではなく、ウィル曰くいらないも同然。

戦闘能力が極めて高く、弱冠十五歳にして元帥を務めている。

ポジティブシンキング。名前を聞いたら、一先ずあだ名。

容姿は好青年という感じで上の上。運動神経、戦闘能力はそれを超える。しかし、頭は壊滅的。魔法を使える。中でも毒の魔法が得意で、持っている短剣には全て毒魔法がかかっているとか、いないとか。

「好きな人と、それ以外！」

まずはここまで。

台詞は、人類を何と何に分けるか、です。

No. 1 日常から非日常への転落事故（前書き）

不運なこれまでの日常が突如終わりを告げた。と思ったら、不運なのはそのままにもっと混沌とした状況に。

喋る黒猫が現れ、強制トリップ？そして、幼馴染のイケメン大魔王が並行世界の王だそうで。え、俺、従者！？

No.1 日常から非日常への転落事故

日常

それはとても不安定なものだ。

何故って、俺にとっては日常でも、赤の他人から見れば非日常かもしれないから。

その反対も勿論のこと。

そして今の俺が非日常だと思っていることも、それをいざ体感し、その状態が永く続けば日常となる。

だから例えば、隣にいる壮絶なイケメン性悪野郎に常日頃迷惑かけられたり、家に帰ったら帰ったで、腐ってる姉貴に萌えトークやらを問答無用でされたり。

そんなことも日常ではなくなり、さよならグッバイすることも、十分有り得る。

否、絶対に有り得る。

なのに、俺と不幸との運命の赤い糸は、ダイヤモンドでできているらしく。

一番変わってほしいところが、変わってなかったりするみたいだ。

「……………」

「はい」

「……………」

「何の冗談？」

普通に手紙（それはラブレターなのだが）を渡そうとしただけなのに、怪訝な表情を向けられる。

なんだ？渡すときの顔が、不機嫌だったからか？

そんなことで怒るんですか、俺様くんは。

そりゃ、不機嫌にもなるだろうよ。媒介になんてされれば。

「何って、ラブレターだよ」

「それは見たら分かる。俺は、何の冗談かって聞いてんの」

「冗談も何も、いつものやつ」

「だから、な……、……ああ……」

やっと理解できたらしく、彼 みやぞのれこせ 宮園零矢は歪ませていた表情を元に戻した。

しかもその後、捨てといて、なんて言うもんだから、その整った顔に拳をねじ込ませてやるうかと思っただ。

そうすると、後でどんな報復にあつか分からないので、青筋を立てながらも踏み留まり、了解の返事をしておく。

「お前からのラブレターかと思った」

「はあ！？冗談言うのも程々にしとけよな」

言っておくが、俺はノーマルだ。

しかも、アブノーマルに関しては、姉というトラウマがいる。

姉のせいがおかげか、気持ち悪いとまでは思わないが、自身がなるのは勘弁してほしい。

つくづく、何故腐女子の弟に生まれてきてしまったのかと、思春期真っ盛りの頃は思ったものだ。

今はあまり何とも思わないが、自分をネタにされるのには、今も頭を抱えている。

しかも、その殆どが横の傍若無人大魔王こと零矢となのだから、居た堪れなくて仕方が無い。

「…そのこと、姉貴には絶対言っなよ」

「えー…、どーしよっかなあ〜」

「あゝあ、もうっ！お願いします、零矢様！！マジで止めて!!」

「明日の昼飯で、ジュース奢ってくれたら、考えてやってもいいぜ」

悪魔が心底愉しそうに笑う。

どんなに悔しくても、その条件を呑むしか俺には道が無い。

もう一つの道である、姉貴のネタにされ、挙句の果てにはあの薄っぺらい本、呼称同人誌にされるかもしれない道を選ぶ気には到底な

れない。

その道を選ぶという事態が起きるときは、自分のアイデンティティが喪失したときのみだ。

「…分かりましたよ。奢りますよーだ」

そう言うと、すっげえ女子にモテる男だけが作り出せれるような笑顔向けられた。

…もういっそ、芸能人にでもなれば？

俺なんかに無料でそんな値段のつきそうな笑顔を振りまくよか、しつかりしたファンに撒き散らす方がよくな？

なんて思う程の、笑顔だった。

話を結構前に戻すと、あのラブレターは隣のクラスの女子から預かったものだ。名前は知らん。

零矢くんに渡してえ、だつてさ。自分で渡せよー！なんて言えるはずもなく、仕方なく受け取った。

で、結果は以上の通りだ。零矢は全くもって、興味が無いらしい。いつものことだけど。

しかも後処理を俺に任せるっていう、悪人だ。…一回地獄に墮ちろ。というわけで俺は明日、隣のクラスの女子にラブレターを返して謝罪、なんていうことをしなければならぬ。上手く対処しないと、泣かれる。良くて、八つ当たりされる。あーもう、ヤダヤダ。

なんで俺が……、という理由は、隣の王様気取りに聞け。聞けるもんならぬ。

というふうには、極悪非道神様気取りだというのに、顔は良い。顔は後、スタイルも良い。

見た目に関しては、完璧と言っていいだろう。

日本人らしからぬ暗い赤毛と、これまた赤い瞳。つり気味なのが、これまた嫌なほどにお似合いだ。

身長は結構高い方で、俺と同じくらいだが、ほんの少しだけこちらが低い。

ちなみに俺は、黒髪黒目の典型的日本人外見。だから零矢と二人でいると、取り巻きの存在で嫌だ。といっても、こいつとは腐れ縁で中々離れない。

俺、嘉山^{かやまのいち}琉吉は今高校三年の十七歳なわけだが、こいつとは幼稚園から一緒だ。しかも、全て同じクラス。ここまでくると、いつそ清々しい。

元凶は、家が隣同士だということだ。勿論、親同士仲が良い。

そうすると結果的に、登下校一緒 仲良くなる なんかせ色々巻き込まれる、という展開になるわけで。

簡単にいうと、超腐れ縁の幼馴染ってやつ。

「で、今日は何回と何枚？」

「四回と十六枚」

「聞いた自分に後悔した！！」

零矢は嫌味っぽくもなく、至って普通なことのように、さりとりアルな数字を吐き出した。

ちなみにこれは、今日告白された回数と、貰ったラブレターの数だ。

「琉吉は？」

「え？」

「されたんだろ？」

「ああ……。一回と、二枚だけど」

「ふうん」

「到底お前には及ばないよ」

でもこれは、結構な数字だった。しかも、今日がたまたま、とかじゃない。

普通の男子なら、ラブレターなんて一年に何回貰うか、って程度。告白なら、それはもっと低くなる。

隣の、全世界の美を集めましたー！みたいな奴ほどではないけど、まあまあモテる方だと思う。

顔も、悪くはないかと……。上の下くらい？

まあ、零矢と友達っていうのも、かなりきてると思うが。

それと、自分で言うのもなんだが、結構頭は良い方。学年でトップ

3には入るほどに。ちなみにその中には、零矢も入っている。ついでに言くと、零矢は運動神経も抜群に良い。剣術とか習ったりしてる。所謂、主人公気質なんですね。

俺は普通。可もなく不可もなくってかんじ。

あ、でも、射的は得意中の得意。これが、唯一零矢に勝てるものだ。祭の射的では、まさに俺のターンってやつ。

一度本気で習おうと両親に話をもちかけたが、そんなところ処にも無い、とか言われてあっさり撃沈。あるかもしれないのに……。一応探す、とかしてほしかった。

姉貴に愚痴ると、射的とか銃とか言った途端、別の世界へ旅立った。脳内の妄想で、忙しくなったよう。結局、最後まで愚痴れなかった。

そんな少々苦い思い出を出していたとき、近くで聞きなれない音が耳に入った。

フォン、というような、ゲームの効果音みたいな音。

思わず隣の零矢を見ると聞こえていたようで、周りを探るような目つきになっていた。

だが、周りを見渡しても見慣れた景色ばかりが並んでいる。特にこれといった変化も無かった。

聞き間違いかと思って顔を正面に向けた途端、何やら声が聞こえてくる。

「こんな所にいたんですか」

その声は普通の人間の声。別に聞こえても可笑しくはない声だ。低めのその声は、男のものだということが分かる。

だが可笑しいのは、その声が目の前の”猫”から聞こえたということだ。確かに、目の前の猫から聞こえた。

どこにでもいるような、普通の黒猫。服を着ているわけでも、二足歩行なわけでもない。しかしよく見てみると、首輪だと思っていたものが違うものだとなった。勲章だ。なぜ、猫に勲章？

零矢はというと、その猫を凝視していた。やはり、誰にでも見える猫のようだ。幻覚とか、そういうった類のものではないらしい。

自分の頭が正常だと分かったのはいいが、こんな奇怪な生物とどう接したらいいのかを考えるには、頭が衝撃を受けすぎていた。

「全く……。何事も無かったからよかったものの。敵のこんな魔法に出し抜かれるとは……」

「……………」

「……なに、この生物」

やはり喋った。聞き間違いではないようだ。

零矢が零した言葉に気がつかないまま、猫は説教？みたいなことを言い続けていく。なんだ、この猫は。

そして溜息を吐いた。猫が溜息で……。シユールすぎる。いや、喋る猫という時点で、十分シユールなのだが。

「はあ……。もういいです。さっさと戻りましょう」

「戻る？」

俺の言葉を無視して、猫は空気を引っ掻くような仕草をする。するとそこだけが、何やら歪み始めた。

そして最終的には、ぱっくりと切れ目が入ったようになってしまった。切れ目の先は、ただの闇。

その切れ目は周りを侵食していき、大きな穴となる。勿論先は、闇入ってみたい、などという好奇心すら湧かない。

だがそれはもの凄い速さで膨らんでいき、このままいけば、俺達をあっさりと飲み込んでしまうだろう。

非科学的、非日常的、非現実的。

そのことで頭がいつぱいだった俺は、反応に少し遅れてしまう。しかし気がつくと同時に、隣の零矢の腕を掴んだ。そしてそのまま引っ張って、とりあえず脱出しようとする。

けれど、足は一步も動かない。何故だ何故だ。竦んでる、なんてことは無い。恐怖という感情が無いからだ。でも、足が動かない。

もしかしたら、あの猫が何かしているのかもしれない。こんなことまでできるのだ。できても不思議ではない。存在自体が不可思議なのだから。

猫を見ると、俺の行動に何故か驚いたようだ。首を傾げている。

妙だ。猫がしたのなら、なぜ驚く？分らない、分らない。

零矢も動くことができないのか、俺に腕を掴まれ立ちすくんだまま

だ。運動神経がいいはずなのだから、すぐに行動をしても可笑しくない。だが動いていないということは、動けないととっていいだろう。

そうこう考えている内に、闇が視界を閉ざしていく。閉じていく扉のように、一筋の光も最後には消え去った。

何も見えなくなる。完全な暗闇。何も見えなければ、何も聞こえない。

あー…、俺、死んだ？さっきの変てこなやつのおかげで。

けれど、掴んだ零矢の腕の感触だけは、まだ手の中にあり続けている。そのおかげで、意識を何とか持つことができた。

でも、本当に何も無い。無だけが有る世界。

宇宙の果てって、こんな感じなのかもしれないな。

ふとそのとき、目の前に光が現れた。

No.2 王であり偽王である

光は、先程の闇のように俺達を包み込む。眩しさに耐えれず、目を閉じた。

パンツ、という何かが破裂するような音が響いた。目を瞑っても進入してきた強烈な光が、途端に薄まる。

目を少しずつ開けて見たもの。それは、別世界だった。

「さあ、着きました。戦争は一旦休戦となりましたので、そのことについて色々と話が……。…？どうしたんですか？」

「え、え、え？ね、猫、じゃなくて……。…？」

「…猫耳……」

目の前で訳の分からないことを話しているのは、あの黒猫ではなかった。だが、口調や声は全く同じ。

真っ黒の艶やかな耳も、黒髪の間から生えている。だが、圧倒的に違う部分がある。彼は、人間だったのだ。

黒縁眼鏡をかけた黒髪で、黄金色の瞳をもった二十代前半だと思われる人間。上の上くらいのイケメンだ。白を基調とした、一風変わった軍服のようなものを着ている。右肩にだけケープみたいなのをぶら下げている。猫のときに着けていた勲章も、しっかりと着けていた。

だが何より目に付くのは、黒髪の間から覗く、これまた黒い猫耳。

黒同士であまり目立たないが、俺には十分の衝撃を与えた。このま
まいけば、尻尾まで生えてそうな勢いだ。

それに、いまいち状況が呑み込めない。あの眼鏡は、戦争がどうと
か言っていた。平和な日本では、聞き慣れない言葉。聞きたいとも
思わない。

何故そんなことを俺達に言うのか、それが一番の疑問だ。

そんな俺達のおかしな様子に気づいたのか、眼鏡の彼も腑に落ちな
いような表情をし出す。

この状況を打開するため、疑問を口にしようとするが、横の零矢に
阻まれた。

「……色々疑問はあるが……、第一、何故そんなことを俺達に言うん
だ？」

「……仰っていることが理解できないのですが」

インテリ系眼鏡の彼が、動揺を隠せないといった様子で眼鏡を上げ
直した。うん、すごく様になる。

しかし、暫く時間を置いた後で、彼は驚愕の表情をとりだす。それ
はもう、見てることちまで不安になるような顔。

彼は少し多めに息を吸った後、零矢にあることを聞いた。

「……私の、名前が、分かりますか？」

「…いや、分からない。顔に見覚えも無いな」

「まさか……、いや、そんなはずは……。…あなたはどのです？」

「さっぱり」

俺は首を横に振りながらそう答えた。

彼は途端に無表情になる。そして、落胆したような声で言った。

「…【パラレルワールド並行世界転移ワープ】の失敗……？それにしても、運が良すぎる。もしくは……」

「おい、俺達にも分かるように説明してくれないか。ここが何処なのかも分からないし」

「それにしてもこの部屋広いな！。偉い人の執務室みたいだ」

零矢とは対照的に、あまり緊張感のないような声を出す。現実味が無いせいだ。すると何故か、零矢に睨まれた。

だが本当に、この部屋は広い。本棚がずらりと並んでいて、その中には本が所狭しと納められている。その本の背表紙には、見たこともない文字が書いてあるが、不思議なことに読める。そのことに疑問を持ちながらも、さしてあまり気にならなかった。

部屋の奥には大きいけれどシンプルな机があり、その机の上は書類

や本で溢れかえっている。それを見ると、自分では気づかない内に自然と口角が上がっていた。

「…この部屋を見て、何か思うことはありませんか？」

「思うことあったって、ここに来たのは初めてだし……。ただっ広いとは思っけど」

「俺は、ちょっと懐かしいような気がする」

気がするというか、感じるというか。中学校時代の友達と再会したときのような、そんな感じ。俺がそういうと、零矢は周りを見渡す。そしてあの机を見ると、俺の意見に同調した。

「……そう言われてみれば、そうかもな」

「ここに来たこともないのにそう感じる。つまり、ここに来たことのある人格が、あなた達の中にいるということですよ」

「「……は？」」

見事にハモる。眼鏡の彼は、今にも頭を抱え込みそうな雰囲気だ。嫌な予感的中した、みたいな。

それにしても、あの言葉は一体何なのか。ここに来たことのある”人格”？つまり、二重人格ってこと？いやいやいや、ないない。どこの漫画の世界だよ。俺の姉貴が喜んで食い付くぞ。

とは言ったものの、彼が冗談を言っているようには見えない。あくまで真剣。

「あはは アメリカンジョークですよ」「などとは、言ってくれそうにない。てか、言ったら張り倒す。

彼は零矢の方を向くと、衝撃的な一言を言い放った。

「あなたは王であり、王ではないということですよ」

聞き間違いでなければ、彼は零矢が王だと言った。王？こいつが？確かに、王様気取りではあるけれど、実際に王様ではなかったはずというか、根本的に零矢が王だということはおかしいのだ。何故なら、現代の日本に王など存在しないのだから。勿論、天皇は別にして、だ。

言われた本人も、予想範囲を上回っていたようで。理解不能、と顔に書いてあるようだ。

彼はそんなこちらの様子に気づいているのかいないのか、少々遅めの自己紹介をする。

「私は王の側近で参謀役、ウィルフレッド・オドワイヤーです。本

「当に知りませんか？」

「……残念ながら。ちなみに俺は、宮園零矢だ」

自分も続けて自己紹介をする。

本当に知らないのか、と言われても、外国人の名前を聞くのも初めてなのだ。知っているはずがない。はずがないのだが、何故か気になる。

でもそれが何故なのか思い出せなくて、気持ちが悪い。ほんとに、なんなんだ、もう。

No.3 従者であり偽従者である

「これは推測なのですが、多分確実でしょう」

「……………」

ウィルフレッドさんの言葉に、俺達は押し黙る他無かった。彼の話は、到底信じることのできないことだったが、辻褄は合うらしい。彼の話はこうだ。

ここは君主を国王とする国、「ワードライト帝国」の首都、「レイマーサー」にある王城だという。

この国は、つい最近まで隣国の「サファン王国」と戦争をしていて、今はあくまで休戦中。いつ戦争が起こってもおかしくないらしい。ワードライト帝国の国王、レイ＝ファードイナンドとその従者であるレイチ＝オルムステッドが、サファン王国国王との戦いの途中、行方不明になったという。

理由は実に明確。サファンの国王の従者が使った魔法により、【並^{パラ}行^{レル}世界^ド転^{ワー}移^プ】をしてしまい、この世界の並行世界、つまりは俺達が生きた世界に飛ばされた、ということらしい。

しかし、【並行世界転移】は絶対にできないというわけではなく、現にウィルフレッドさんもできる。だからといって、ほいほい使えるものでもないらしい。

【並行世界転移】は、魔力の弱い者が使うと失敗する。魔力が弱くなくても、失敗する確立は大いにあるという。だが人外であればあ

るほどその確立は減るらしく、そのため彼は猫になっていたというわけだ。ちなみに彼は獣人なのだと言っていた。

失敗すると起こる現象。それは、並行世界での自分との融合、そして一体化だ。

意識は元々その世界にいた方にあるらしいが、時間が経てば経つほど一体化してくらしい。主に記憶、知識の共有など。どちらか一方の身体能力が高ければ、それも共有したりする。つまり、一つの身体に、二つの魂が入っているということ。

でもそれだと身体が耐えられないため、【並行世界転移】をした方の魂が半分になるそうだ。すると魂は1、5個になり、身体はぎりぎり耐えられる。

そのため意識の主導権は元々いた方、ということになり、入ってきた方の意識は徐々に薄れていき、消滅するそうだ。

つまり、俺達を感じた懐かしさなどは、入ってきた自分が感じている、ということになる。

以上が、ウィルフレッドさんの推論だった。

「簡潔に纏めると、現在この身体には『宮園零矢』の意識と、『レイ＝ファーディナンド』の意識があるってことか？」

「そついうことになりますね」

「え、じゃあ、俺は従者ってこと!？」

「レイチ＝オルムステッドは、王に一番近い側近で、元帥にして先鋒と参謀を務めています」

「状況が全く理解できないんですけど……」

続けざまに、その王と従者の説明をされる。

王は歴代の中で最年少で王になるといふ偉業を果たしているらしく、方法も革命で王になったそうだ。

一風変わった王らしく自らを大元帥とし、一人の兵として戦場に出てるんだと。はっきり言って、大元帥とか意味分からん。階級とかなんか？

この王になってこの国は急成長を遂げたらしく民衆からの支持も高いそうだが、貴族層とプロシットという宗教団体を敵に回しているそう。

異名は『紅蓮の強き賢王』。

そんな王の一番の側近、ルイチ^ルオルムステッドは元帥にして自分の軍を使い、先鋒役を務めているらしい。その上参謀でもあるそう

で、参謀は彼とウィルフレッド、後もう一人の三人。彼は王と幼馴染の関係らしく、革命の際も活躍したらしい。そのまま王の側近となっている。

銃の使い手で、魔力を込めて撃つ、二丁の魔銃を普段は使う。しかし、どんな銃でも使いこなせるらしい。

そこでついた異名は『漆黒の二丁^{トゥーハンドガンナー}射撃手』だそうだ。

「質問してもいいか？」

「どござ」

「俺達は、これからどうすればいい？というか、帰れんの？」

「……………」

こういう展開って、大体帰れないんだよな。ウィルフレッドさんも、ちよつと難しい顔してるし。

それにもし俺達が帰れたとして、この国はどうなるんだろうか。休戦中の危ない中の王不在は、さすがに厳しいと思う。政治とかあまり分からない俺でも、これくらいは分かった。

零矢もそれが分かってているのか、半ば諦めたような顔。俺も、そんなに期待しないでおこう。

「絶対には言いませんが、元の世界へ戻るのはほぼ無理かと」

「一応、なんでか説明してもらえろ？」

「パラレルワールド並行世界というのは、ある意味無限に存在するのです。物には原子が存在し、それ以上は分けることができませんが、時というのは無限に切り続けられるのです。そしてその中の一つ、数えられないほど一瞬の内あなた達は存在していたわけです」

「どございうことだ？」

「つまり、無限に存在する並行世界の全てに、別のあなた達が存在

するのです。【並行世界転移】をした所が、あなた達がここに来るより0、0000001秒進んでいたとすると、別のあなた達が存在します。自分と同じ人物がいる世界で存在できますか？社会的問題の他にも、並行世界の均衡が崩れる可能性があります」

「でもウィルフレッドさんは、【並行世界転移】とかいっのをしたんだよな？あれって、魔法とかいうやつ？」

「そう、魔法です。けれど、【並行世界転移】ができる人物は、世界に十人と存在しないでしょう。それに、【並行世界転移】は均衡を崩さないためにも一定時間が経つと戻るようになっていきます。勿論、失敗したときは戻りませんが」

つまりそういうことらしい。時間の問題を無視したとしても、帰る方法が無いのだ。

ということは、こんな魔法なんていう非科学的なものが存在する世界で永住ってこと！？

元の世界にはあまり未練が無いように思えて、結構有るんだよな。未練ってやつが。

しかも永住ってことになる、また零矢と一緒にということに。何なのコレ。運命の赤い糸的なもの？うわ、気持ち悪っ。

「…ですが、一つだけ帰る方法があるかもしれません」

「え、本当に!？」

「はい。実は魔法が使えるのは、限られた国に生まれた者だけなのです。この国と、サファンの国民は使えます。他にもいるのですが、それは後ほど」

話によると、魔法が使えるのは数ヶ国の国民だけだそうだ。そして本題は、何故魔法が使えるのかだ。

この世界は地球のように丸くはなく、平面でまさに地図のような形をしているらしい。このことを学者は、フラットホーダー平面界とアウトキーツ言う。摩訶界と呼ばれる地図の果てに行った者は、全員帰って来ないのだと。ただ見れば、海が広がっているだけらしいが。

海と陸の比率は、1：1。陸が円を描くように海を囲んでおり、陸に囲まれている海を内海、陸の外側にある海を外海というそうだ。

魔法の話に戻すと、魔法は魔力が【マテリアルリリース魔力源樹木】から放出されていることによって使用することができる。その放出される地域が、限られているというわけだ。

だからと言って、放出されている地域に行けば誰もが魔法を使えるわけではない。その地で生まれた者だけが、【魔力源樹木】からの加護を受け、使えるのだという。稀に、魔法が使えない者が生まれたり、逆に魔力が無い地域で魔法が使える者が生まれたりすることがある。

魔法が使える者をマテリアルホルダー魔力保持者、魔法が使えない者をロストマテリアル非魔力保持者という。魔力保持者が多い国では非魔力保持者を、非魔力保持者が多い国では魔力保持者の差別が社会問題となっているらしいが、国自体が見て見ぬふりをしていることが多いらしい。

そして、一番大事な戻る方法。それは、【魔力源樹木】を利用するのだという。

【魔力源樹木】は魔力を放出するだけでなく、時を操ることができる

るという言い伝えがあるそうだ。それと同時に、【魔力源樹木】の葉に自分の魔力を送り込むだけで、どんな魔法でも使えるようになるらしい。それが実在しない魔法であつてもだ。
つまり【永久転移^{パーマネンスワープ}】をすることが可能になり、それと同時に時を操作すれば、元の世界へと戻れる、というわけだ。

「なんだ、帰れるんじゃない」

「じゃあさつさと、魔力源樹木^{マテリアルリリース}とやらがある所に連れてつてくれ」

「もう少し、頭を働かせたらどうですか？もし魔力源樹木がある場所を私が知っていたら、戦争なんて起こっていないと思えますが。第一、国なんていうものも存在しないと思います。誰かが世界征服なんてことをしてるでしょうね」

「……確かに、魔力源樹木の能力を使えば、世界征服なんてあつと言つ間だな」

「ということは、魔力源樹木がある場所を誰も知らない……？」

「そういうことです。ですが、この世界のどこかにあることは確かです」

「なんで言い切れるんだよ。誰も見たことがないんだろ？」

「感じるからです。私達魔力保持者は、魔力源樹木の存在を感じる事ができるのですよ。……まあ、あなた達もいずれ感じるようになると思います」

信じる信じないはあなた達の勝手です、とウィルフレッドさんは言
ったが、信じるも何も信じるしかないだろう。それが、どんなに常
識的に考えて有り得ないことでも。とりあえずそれを信じて、唯一
の帰り方に向けて、何か行動を起こさなければならぬのだ。

だが、そんな誰もが喉から手が出るほど欲しがらる木だ。大勢の人が
探しに行ったことだろう。摩訶界に行った人々も、それが目的だっ
たと思う。

それなのに、何処にあるのが全く分からない。一国の王も、家来
に探させたはずだ。なのに、手がかりさえも掴めない。そんな幻覚
みたいなものを、探し出せれるだろうか？いや、無理。

もう、帰ることはできないんだ。

No.4 もう一人の側近

「もう無理か……」

「はあ……。地道に探すしかないな……」

「え!？」

諦めよう、と言いかけたとき、信じられない言葉を耳にする。それは勿論、王様（仮）の零矢からだ。ウィルフレッドさんも、半ば呆れたような表情をしていた。それだけ、見つけ出すのが困難だということだ。この世界に住むほとんどの人が、【魔力源樹木】マテリアルリリースを見つけることを諦めているのだろう。

それだというのに、零矢は全く諦めていないようだ。というか、諦める気など無い、というふうだった。何が彼にそんな自信をつけさせているのだろうか。

零矢の意見が現実味を帯びていないことを理由に、一応俺は彼に反論してみる。

「そんなの無理に決まってるだろうが」

「なんで無理なんだ？」

「大勢の人が探しても見つからなかったんだ。俺達だけで探しても、見つかりっこないだろ？」

「お前な、もつと頭使えよ。学年一位の座が泣くぜ？」

そう言うと零矢は、ウィルフレッドさんの方を向く。そして悪人のような、それでも綺麗な笑みを浮かべると言った。

「利用できるものは、全部利用すればいいんだよ」

なんとなく、零矢の考えているが分かってしまう。その内容の恐ろしさに、背中を冷や汗が伝った。そして俺が思っていた内容とさして変わらないことを、零矢は口にする。

「俺は、王なんだろ？」

「あんまりだ……」
「なんで？」

今現在、俺達は王の私室らしい所にいる。零矢が話をした後、ウィルフレッドさんはもう一人側近を呼びにいった。その間、俺達はここに待機だそうで。

零矢の話はたしかに筋は通っているかもしれないが、それだけでは済まない話だった。しかも俺は、完全に巻き込まれる。いやまあ、巻き込まれない、なんてことはないと思うが。

「王になるとか、有り得ないし」

「琉吉は従者だけだな」

「うん、まあ、色々と不満はあるんだけどさ」

「いいじゃねえか、あっちとこっちの利害は一致してるんだ」

つまり零矢の話は、零矢がレイ「ファードイナンド」として、王になるということだった。王になれば、【魔力源樹木】が見つかる確立が、大幅に上がるためだ。

それに、向こう側としても、今王がいなくなるのは厳しいらしい。休戦中の不安定な今、国民を動揺させることは避けたいようだ。

そうすると必然的に、俺もルイ「オルムステッド」として、王の側近ならぬ従者になるということだ。

だがそうしないと、この世界で生きていけないことも事実だ。俺と零矢は、王とその従者と全く同じ顔、体型らしく。一般人に紛れて生活するのは、困難なのだ。

「それとも琉きは、戻りたくないのか？」

「いや、戻りたいけど……」

「じゃあ、何が不満なんだ」

「不満ってというか、心配？政治とか分からんし、戦うとか許容範囲外」

「眼鏡が言ってただろ、融合してるって。つまり、自覚がなくてもできるってことじゃないのか？」

「そのことなんだけど、あの人はどう思ってるんだろっな」

「あの人って、ウィルフレッド？どうって、なんだよ」

俺はずっと疑問に思っていたことを、零矢に言ってみることにする。疑問に思っていたこととは、ウィルフレッドさんの心中についてだ。

「多分慕ってただろう王がさ、異世界の人と一体化すること、どう思ってるのかなって。零矢は彼が知ってる王であって、王でないってことだから……」

「微妙な心中だろうな」

「しかも今後一体化が進んできて、記憶を共有することになったときとか、ヤバいことになりそうだし」

「でもそうになると、俺達はどんなんだよ。こつちでの記憶と元の世界の記憶が混ざるって、相当ヤバそうだし？」

埒が明かなかった。今起こっていない、体験していないことを聞かれたって、答えることなんてできない。全くとって、想像もできなかった。何しろ、それについての知識が無い。

もつと分からないのは、ウィルフレッドさんの心中。最初は結構動揺していたが、冷静な性格らしく、すぐに落ち着きを取り戻した。そのため、どう思っているのかなど、正確には分からなかった。

「……それにしても、遅くないか？」

「もう一人に、状況を説明してるんだと思うけど」

と丁度そのとき、部屋に扉を叩く音が響く。入ってきたのは、ウィルフレッドさんと見知らぬ青年。

歳は二十歳前くらいの容姿で、俺達とそう変わらない。髪色は橙っぽい金髪で、目はオリーブグリーン。ウィルフレッドさんと同じ服装なことから、同じ役職だということが分かる。

そんな彼は零矢を見ると目を見開いて、何故か零矢に飛び掛かった。

「レ、レイさあああああああんんっっ！！！！」

「な、なんだ！？っは、は、はなせ！！ウィルフレ…、説明したんじゃ……！！！！」

「一応したんですが、信じなくて」

「心配したんですからああああああああ！！！！！！」

「お、おい！俺は、レイじゃな…くもないが、レイじゃねえ！！…ああ、もう、鬱陶しい！！」

「ぐへっ」

零矢は彼を蹴飛ばした。その名の通り、蹴飛ばした。すると、彼は俺の足元に崩れ落ちた。面倒臭い雰囲気だったので身を引こうとすると、いきなり足首を掴まれる。

「！？」

「ねえ、ルイチ。レイさんが変なこと言ってるんだけど、意味分かる？」

「いやまあ、俺も、ルイチだけどルイチじゃないんで……」

「……」

物凄い速さで、彼は唐突に立ち上がった。この人見ると、心臓に悪すぎる。彼はそのまま、ウィルフレッドさんに詰め寄る。

「どういうこと！？ルイチの態度が変すぎるよ！」

「だから、さっき説明したでしょう」

「……え？あ、あれって、本当に……？」

震える声で彼はそういうと、剣幕な表情でこちらを見る。流石にまだ信じられないようで、問いかけるように見ていた。暫く沈黙が続いた後、彼はある質問をしてきた。

「……じゃあさ、後ろの眼鏡のあだ名って、分かる？」

「何故、質問がそれなんですか……」

勿論答えは、否だ。何となく、予想がつくような気もするが。俺は無言のまま、首を横に振る。その後零矢も、知らないと言った。当たり前だ、ついさっきまで名前すら知らなかったのだから。彼は下を向いていた。一瞬、泣いているのかと思ったのだが、それは違ったようで。顔を上げると、すごくポジティブな結論を出した。

「でも失敗したとしても、君達はレイさんとルイチだしね！」

いやまあ、確かにそうなのだが。なんとなく、彼の性格が分かった気がする。

彼に王の側近が務まるのかと思ったが、人を上辺だけで判断してはいけないしな。すごく頭がいいとか、戦闘能力が高いとかあるのだろうか。

「僕は王の側近で元帥にして参謀役、セシル＝ラヴァーティ。ちなみにあだ名の正解は、ウィルだよ。ウィルフレッドって、長ったらしいでしょ？」

No.5 王様取りが王様に

「セシルは参謀役ですが、いていないものだと思って下さって結構ですよ。底無しの馬鹿なので」

「ウイルってほんと、容赦ないっていうか。否定はしないけど」

「じゃあなんで参謀なんだよ」

「だって、ルイチとウイルに任せとけば、大体上手くいしくし」

「彼が側近なものも、戦闘能力の高さゆえです。『ボイズンダガーコントローラー短剣使いの毒魔士』
と言われるだけあります」

やはり戦闘能力がずば抜けて高いようだ。そうすると気になるのは、ウイルフレッドさんの戦闘能力だ。
側近なのだから、ある程度高くないではやっていられないだろう。

「ねえ、ウイルフレッドさん「ウイルフレッド」さん」!？」

喉の奥で、空気を切るような音がする。びっくりした。マジびっくりした。確実に寿命縮まったと思うんだけど。長生きしたいから、

あまり心臓に負担かけたくないっていうのに。
それにさっきの言葉のどこに、突っ込むべき要素があったのか。

「いやいやいや、その顔でウィルフレッド”さん”って言われると
キツイので、ぜひウィルと呼んでやって下さい」

「なんであなたが言うんですか」

「別に構わないけど。一応初対面だし、さん付けした方がいいかと思っただけだから」

「……………」

俺の言葉に、セシルという彼は何故か押し黙った。ウィル（そう呼べと言われたんで）の表情も曇る。
なんだか微妙な空気が流れる。そんな空気を打ち破ったのは、零矢だった。

「あのさ、ちょっと気になってたんだけど」

「何がですか？」

「何で、俺達のいる場所が分かったんだ？」

「と、言いますと?」

「さっき、並行世界は無限に存在するから帰ることはできないって言うてたけど、俺達のこととは見つけたよな?」

零矢が言っているのは、王とその従者の魂が入った俺達を、何故見つけ出すことができたのか、ということだろう。

たまたま見つけた、なんてことは無いはずだ。あの話が本当なのであれば可能性としては、1/無限なわけなのだから。

「ああ、そのことですか。そういえば、説明していませんでしたね」
「何か理由があるのか」

「王の側近エンイトというのは全員で六人いるのですが、その中でも『トレップ最親側近』と『インテイク親側近』は、王と『フォーローズコントラクト永久忠誠契約』というものを交わします。そうすることで魂が繋がり、場所が分かるのです。それ以外にも、色々あるのですが」

「【永久忠誠契約】は、王が死んで魂が消滅するまで破棄されないんだよ」

「つまり、今も【永久忠誠契約】は有効、というわけか」

「そういって!」

零矢の中には、レイ「フエーディナンドの魂が半分ながらある。つまり、【永久忠誠契約】の相手が零矢に変わるが、継続されるといわけだ。

でも死ぬまで破棄されないということは、零矢が王にならないと、この人達にまで被害が被るということか。

ちなみに、ウィルとセシルは親側近。ルイチ「オルムステッドが最親側近なのだそうだ。つまり、俺も【永久忠誠契約】を零矢と交わしているというわけだ。しかも最親側近なんていう、超重要役職。マジで勘弁してほしい。

側近には三つの位があり、もう一つは「側近^{エイド}」。つまりは、ただの側近というわけだ。側近は三人いるそうなのだが、この三人にはまだ事情は説明しないとのこと。

「それじゃ、本題に入ろう」

「それで、答えは？」

「決まっています。今はまだ自覚が無いかもしれませんが、あなた達は王とその従者なのですから」

「え、え？何の話？」

「あなたは黙っていていいですよ」

そう言われると、はいと返事をして黙ったセシル。多分毎度のことで慣れてるんだろう。そうじゃないと、今の言葉は結構キツそうだ。

「了承する、という事だな？」

「はい。魔力源樹木マテリアルリリスを探すことも、了承します」

「……………」

「?どうしたんだ、琉吉」

「いやあのさ、俺達は何をすればいいのかなー、って」

はっきり言つて、俺が一番気になっていたのはそこだ。側近であるルイチ^{II}オルムステッドの魂が自分の中にあるとしても、今の状態は、何も知らない子供が今日からお前は王の側近だ!と言われたことと大差ない。

いつか記憶を共有するとしても、今はまだ何も知らない。そんな状態で、最親側近なんていう重要な役職が務まるわけがなかった。

「俺にできないことはない」

「はいはい零矢はね。俺はどうすんの」

「記憶の共有が始まるまでは、私達で出来る限りサポートします。ですが、ある程度の知識は頭に入れておいてもらわないといけません。ですので、」

ドサドサドサツ、と音をたてて空中から落ちてくる大量の本、本、本。それは床に、二つの塔を作った。俺の前には約十冊もの分厚い本。零矢の前には、約二十冊もの本が積み上げられている。到底一日で読める量ではない。

のだが、彼はさぞ当たり前のように、恐ろしい言葉を口にした。

「それを全て、明日までに読破して下さい。いえ、読むだけではなく、一語一句残すことなく暗記して下さい」

……この鬼め。

No.6 従者三人と王の人間関係模様

「『従者の心得』第一章の十一箇条目」

「…主に対しての忠誠の誓いを裏切るような行為を行った場合、誰に殺められようが咎めることはできない」

「同じく第一章の三箇条目」

「…主に対し無礼な行為を行った者は、誰であろうと即刻に不敬罪とし、」

「即刻”に”はいりません」

「……即刻、不敬罪としての実刑を与えるべし」

「だあああああ！もう、細けえんだよっつ！！」

「ていうか！あの本全部こんな感じで、物騒なことしか書いてなかったし！！なんだよ、実刑つて！遠まわしに、殺せつて言ってるじゃねえか！！」

「『最親側近の役目』第一章の一箇条目」

「コソトラクト……第一に、王の保身に務めるべし。危うい場合は【フォロース永久忠誠契約】に基づき、自らを犠牲にすべし」

これも遠まわしに、死ねって言ってるよねー。しかも急に本変えんな！この鬼畜眼鏡野郎が！一瞬焦るだろうが！昨日無理やり覚えたから、ぼろぼろと零れ落ちていったんだよ。覚えてやつが！しかも出題するところはバラバラだし、やってらんねえよ！！

「『ワードライト帝国憲法』第一箇条目！」

「ワードライト帝国は王を主君とした、王政である。王を敬い称えることこそ国民の義務であり、それに応え国民のために職務を全うすることが王の義務である」

「おお！凄い、すごい！！じゃあ、第二箇条目！！」

「国民の人権については人権法に基づき、その権利を剥奪することは王を除いてはすることができないこととする」

「一語一句全部合ってるよ！じゃあ、次は、」

……なんだか、楽しそうな声が聞こえる気がするんだけど。おかしい、この落差はおかしい。

普通、王の方にこの猫耳鬼畜眼鏡がつくべきだろうが！！まあそれでも、零矢は普通に答えられるんだろうけど。

あいつは速読なんてことができ、一語一句全てを写真にとってそれ

を脳に貼り付けるかのように、覚えることができる。しかも、速い。なにしろ、速い。あの量を、小一時間程で読み終わっていたのだから。

しかも、全てを暗記済みの状態で。はっきり言って、超ムカつく。必死で覚えてる俺の隣で、悠々とページを捲っていたのだ。ムカつかないはずがない。

俺が二冊目を読み終わったときくらいに、二十冊もある本を全て読み終わっていたのだ。しかもその後、「え、今から三冊目？」とか吐かしゃがった。気が済むまで殴りたかったけど、そんなことをすると9/10殺しくらいにはされるので、震える手を泣く泣く押さえた。

俺だって、普通の人より読むペースは速い方だ。けど、あいつといると俺が劣等生みたいに思えてくる。天はあいつに、どれだけの物を与えたんだ。一つくらい、劣ったものがあってもいいだろうが。天に一物、いや、五物くらい返した方が良い。きっとそのせいで、誰かが一物も与えられないという事態に陥ってるはずだから。

「何を余所見しているんですか？『最親側近の役目』の雑務についての四十六ページ、始めから十行目まで」

「トップエイドノザツムニツイテハオウノテヲワズラワセルヒツヨウノナイモノヨミキワメハンダンシタウエデソレヲシヨリガチュウシンダガトップエイドセンモンノザツムモア」

「待って下さい」

「ハイ？」

「喧嘩売ってるんですか？何ですか、そのやる気の無い言い方は！」
「やる気が無いんだから、仕方無いだろ」

いい加減、堪忍袋の緒が切れそうだ。言っとくけどな、俺だってキレるときはキレんだぞ！

一回だけ零矢に対してキレて、マジの殺り合いしたことあるんだからな！若かりし頃の無茶なだけだな。でも、結構楽しかったような気が。まああの後、思い出ただけで背筋が凍りつくような目にあっただけだ。

「そんな姿勢では困るんです。あなたはこの国を発展させることも滅ぼすこともできる存在なのですから」

「それは俺じゃなくて、零矢だろ？」

「いいえ。最親側近というのは、は政治における権力が王の次なのです。王に何かがあった場合、あなたが政治をするのですよ？その重大さを分かっているいでしょ！？」

「分かってないもなにも、そんなこと今聞いた！そういう重要なことは、もっと早く言ってくれろ！？」

「『最親側近の役目』第一章の三箇条目」

「なんでそんな急に……。…最親側近は政治において、王の次に権

力を持つ。ついでには、王に不祥事が起こった場合、最親側近が一時的に政治を行うことになる。……？」

「覚えてるのに何が、今聞いた、ですか」

「しょうがないだろ！丸暗記してんだから、意味なんて覚えてないんだよ！！こんな量を一気に出すなんて頭の悪いことをした、誰かさんのせいで！」

あー……、なんか久々にぶつちりいった気がする。頭の中で何かが、ぶちりと切れた。

その後は、ダムから水が流れ出るように、悪態が口から引つ切り無しに出て行く。なんか日頃の零矢への恨みとかなんやらが、晴れていく気がする……。こういうのを、鬱憤晴らしっていうのかもなー。でもなんでだろ。すらすらと悪態が口から出てきすぎなような気も……。俺って、会って二日も経ってない人と、口喧嘩するような奴だったっけ？

ああ、そうだ。俺、零矢と絡み過ぎてて忘れてたけど、結構短気なんだった。…それにしても、言いすぎじゃないか、俺。

そしてお前も言いすぎじゃないか、ウイル。今俺、低脳とか使えなとか口答えばかりとか、なんか酷い言われようなんですけど。

「大体あなたは、物事を考えなさすぎなんですよ。本を暗記するにしても、意味が分からなければどうしようもないことが、分からなかったのですか？」

「だーかーらー！こんな量を一晩で覚えられたことこそ、奇跡なんだよ！！意味も理解するとか、人間技じゃないだろ！零矢を除いて」

「あはは、またやってる」

「また？」

「ルイチとウィルはね、一日三回は喧嘩しないと収まらないんだ。ノエルに言わせると、喧嘩するほど仲が良い、ってやつらしいよ」

「ノエル？誰だ、それ」

「ノエルはノエル。ルイチのおねーさん」

「……この世界にも、琉壱に姉がいるのか。……琉壱っ！！」

「だからって、そんなこ……へ？な、なに？」

ウィルと口喧嘩を継続させていると、急に零矢に名前を呼ばれた。

零矢の方を見ると、何故かウンザリしたような顔。嫌な予感がしないでもない。

まず始めに、頼いと咎められた。俺のせいじゃないと言いつつも、一応謝っておく。

すると「良い知らせだぞ、琉壱」と言われた。全然、良い知らせを伝える顔では無いのだが。

「いや、場合によっては、悪い知らせか」

「何なんだよ。勿体つけてないで、早く話せよな」

「お前には、ノエルって名前の姉がいるらしい」

「……………え？」

「こつちの世界の乃恵美のえみかどうかは、分からないけどな」

「…何か名前からして、一緒っぽい」

俺と零矢が危惧しているのは、もし一緒の人物だった場合、こつちの世界の姉貴も腐女子かもしれないということだ。元の世界では散々迷惑をかけられたのだ。仕方が無いだろう。

勿論姉貴は、誰コレ構わずそういう話をするデリカシーの無いような人では無いのだが、身内である俺と幼馴染の零矢には容赦が無い。姉貴が高校を卒業したのが前学期なのだが、それまで零矢と二人でいるところを校内で見られただけで、帰ると質問の嵐だ。もしそこに他の誰もいなかった場合は、その場で。

実はというと、零矢は俺の他には友達があまりいない。理由は簡単だ。女子にモテる、超絶イケメン、性悪。

けれど零矢自身、大勢とつるむというタイプではないため、全く気にしていないみたいだ。俺はというと……………、うん、思い出したら泣けてきた。

まあそんな感じで、俺と零矢の二人だけでいることが多いため、姉貴に言い寄られることも少なくなかった。

「今何処にいるか分かる？」

「うーん、今だったら自室にいるかも」

「よし、行こう」

「駄目です！まだ確認が終わってないでしょう！？」

「あーもう、はいはい、休憩休憩。監視ついでに、一緒に来たらいいじゃん」

「僕も行くー！！」

俺はウイルスを適当にあしらいつつ、部屋を出ようと扉の方へ向かう。ウイルスもやつと観念したようで、溜息をつきながら零矢とセシルと一緒について来る。

俺は期待と不安を抱えながら部屋を出た。勿論期待は、姉貴がまともだったらいいなというものと、不安は元の世界の姉貴と全く同じだったら、というものだ。

もし元の世界の姉貴と同じだったら、俺はこここの世界の俺に同情する。同時に、俺にも同情してほしい。

そんなことを考えながら俺は、昨夜必死に覚えた本の内容が脳から剥がれ落ちていくのを、感じていた。

「そついえば、聞いてなかったな」

「ん？何が？」

「セシルにとって、俺達がどついう存在なのか」

「ああ、そつか。えっと、ウィルは頼れる先輩って感じだよ。レイさんとルイチは……、」

彼は幼さの残る笑顔で、笑いながら言った。

「命の恩人かなっ！！」

No.7 弟に対する感情の希薄さ

俺は目の前の木でできた扉のノブに手を伸ばす。

その扉には、“ノエル”オルムステッド”と彫られたプレートが打ち付けてあった。

この先に姉がいる。元の世界と同じかどうかは分からないが、何故か同じような気がしていた。こういう予感、大概当たるものだ。

もしこの中にいる俺の姉が姉貴と同じだった場合、確かに自分の不運を呪って嘆くかもしれないが、正直ちよつと嬉しいかもしれない。やっぱりあんな姉貴でも、家族愛っていうのはあるのだ。

つまりこれって、どちらに転んでも美味しいってやつ？とか思いながら、俺は扉を開けた。

「ノエルーー!!」

「あれ、セシル？」

部屋に駆け込んだセシルは、部屋の中にいた人物の名前を呼ぶ。それに応えた声に、俺は落胆した。姿を見なくても声だけで分かる。

”姉貴”だったことが。

でもやっぱり同時に、嬉しさも込み上げてくる。あと、懐かしさもこの世界に来てまだ二日目だというのに、何故懐かしいのかは分からないけど。

俺は後ろにいた零矢に、アイコンタクトで部屋の中の姉が、乃恵美だということを伝える。零矢は溜息でも吐きそうな表情をした。

でも外見が姉貴と同じだとしても、中身はまだ分からない。もしかしたら、中身だけ違っていて腐ってないかも。そんな都合よくいくはずがないけど。

「……………姉貴」

「?……………ルイチ…!？」

俺を見てあからさまに驚いたような顔。あ、そうか。行方不明になつてたんだ。

彼女は見た目は姉貴のコピーみたいなものだった。俺と同じ黒髪黒眼。腰まである髪は、軽く波打っている。結構な美人で吊り気味の黒曜石のような瞳、女にはやや高めの身長で、独特な雰囲気醸し出している。所謂、アジアンビューティーってやつ？
学校ではその容姿のせいで、男女両方から人気があつてモテていた。うん、細かいことは、あまり気にしない方がいい。

「あああ！ルイチ、あんた生きてたんだ!!」

「…実の弟に、よくそんなことが言えたな」

今更なので、特には何も思わない。姉は萌え以外の弟への感情が希

薄なのだ。いや、それには語弊がある。萌えという感情の中に、喜怒哀楽全ての感情がある、らしい。

ということも熱弁されたことがあるが、半分以上聞き流していたのであまり憶えていない。そんなことを記憶に留めて置く隙間があるなら、悪魔の序列を覚える方がよっぽどマシだ。

なんて思っていると、目の前の姉から、驚くべき言葉を聞いた。いや、もう今更だから驚かないって言えば、驚かないけど。

「もう私、ルイチとレイが報われず認められない愛に悲嘆して二人で心中したんじゃないかと、夜も眠れないほどにもうそ……じゃなくて、心配してたんだから!!」

……………うん、腐女子でした。

ていうか今、妄想って言いかけた!? 弟が死んだかもしれないってときに、妄想!? 酷いじゃ済まされない姉だな。

それ以外にもつつこみ所が多すぎて、すでに心が折れかけたよ。なんで俺が零矢と心中しなくちゃなんないんだよ……って、俺と零矢の話じゃないか。いや、俺達の話なのか? ……まどろっこしい!! ああ、そうだ。こんな姉だった。なんか不可思議なことが起こり過ぎて、すっかり脳から抜け落ちてたのかもしれないな。

「あー…、でも良かった。二人共無事だったってわけだ」

「……………」

「ん？どうかした？」

「……どうします？本当のことを話しますか？」

ウィルに小さな声で、そう耳打ちされた。正直言つて、凄く悩む。肉親なのだから話した方が良いに決まってるのだが、弟が異世界の自分と一体化しちゃうんだよー

なんて言われて、喜ぶ姉がいるわけない。いたら鬼だ、姉じゃない。流石の姉貴でも、鬼まではいかないだろう。

俺がこんな姉に家族愛を持ち合わせているくらいなのだから、姉だつて持つてるはずだ。……多分。

萌えないと悲しまないから、感動モノを見てもちつとも涙腺に影響を及ぼさない、なんて言つてたのを思い出して、少し不安になる。大丈夫、大丈夫さ。……多分。

「……肉親だろ？いざつて時のために、言つよ」

「よし、許可する」

「え、これつて、零矢の許可が必要な事項だったのか！？」

「何言つてんだ。俺は王だぜ？」

「……………」

こいつは王を、何か別のものと穿き違えてないか？

本当に零矢が王になっていいんだろつか。破滅するぞ、この国。独裁政治って、良かった例があんまりないし。

まあ一先ずそれは置いといて、目の前の問題から先に片付けることにしよう。

「あの、さ。心して、聞いてほしいんだけど……」

「？」

「俺って、ルイチなんだけど、ルイチじゃ無いっていつか……、えと……」

「??？」

あゝ ああ！もう、上手く説明できねえよっ！！ウィルから説明されたときは、なんとなく分かったけど、自分で説明できるってところまでは理解できてないんだよな。

俺が助けを求めると、ウィルの方を向くと、溜息を吐きながらもしっかりと説明してくれた。俺達に説明するよりかは、ざっくりだったけど。でもあの姉貴はこの世界の住人なのだから、基礎知識くらいは持ち合わせているのだろう、理解はできたようだ。

そして気になるは、姉貴の反応。俺は固唾を呑んで、姉貴の言葉を待った。

「……そんなのって……、ない……。あんまり、よ

」

やっぱり、姉貴にもこづいっ感情が……

「あんまりにも……、萌えすぎるでしょうがああああああ！……」

「……えー……、そりゃないよー……」

思わず声に出してしまう程の、衝撃でした。

No. 8 眠れない午前三時頃

時計の針が指し示す時間は、午前三時。

辺りはひっそりと静まり返っており、暗闇に包まれている。頼りなのは、魔法で作った光源のみ。落ち着いた光の球体が、彼の一步前を漂っている。それでも、長い廊下の先は闇。

小さな足音は、その闇の中に吸い込まれるかのように消えていく。そして時折、鼻を齧るような音も。

その音を発している者が向かうのは、ある人の部屋。彼は、その人に叱咤されるのを承知で、部屋に行こうと決めた。こんな、真夜中に。きつと、寝ているだろう。彼でなくとも、怒るに違いない。

彼はそう思いながらも、部屋に向かう足を止めようとはしなかった。眼を、擦る。光に照らされたその眼は、少しばかり充血しているようだ。そして、腫れぼったい。鼻も赤く、頬は紅潮している。

それは、長時間泣き続けていたことを意味していた。

光源が、廊下の先に人影を映し出した。髪の毛の長い、女性のような。その様はまるで、幽霊。

その二文字が頭に過ぎった瞬間、彼は大声で叫んだ。真夜中だということも忘れて。

「ぎ、ぎやあああああああああああ……!……!……!」

「な、なにii!?!?」

彼の精神が乱れたことにより、光源が跡形も無く消える。それにより、前後を判別できないほどの闇が覆う。そのせいで、彼はより一層悲鳴を上げた。

女性は彼の口を手で塞いだ後、魔法で光源を作る。数秒後、落ち着いたらしい彼が女性の手から抜け出した。

「…なんだ、幽霊じゃなくて、ノエルじゃん」

「あ、セシルだったんだ。こんな時間にここで何を？」

「ノエルこそ。ここ、ウィルの部屋の前だよ？」

そう言うと、ノエルは顔を強張らせた。そして、必死に弁解をする。変な意味で来たわけじゃない、私は見る専門だから、というか自分がリア充になるとかwないない。

等々、早口で捲くし立てる。挙句の果てには、なぜセシルがここにいるのか、ということについての妄想が、口からただ漏れになる始末だった。

その全てを、セシルはスルーした後、ここに来たわけを説明しようとする。

が、その前に、痛い言葉を聞くはめになった。

「あなた達ですか！！こんな夜中に大声を上げていたのは！！」

「あ、ウィル」

「ウィル！あのさ、お願いがあ……」

「非常識な時間帯に人の自室に押しかけてまでする、お願いですか」

「うん、そう。というか、今じゃないと意味が無いから……」

ウィルは溜息を吐く。それでも、”お願い”を聞くことを了承したようだ。ノエルも同じような理由で、ここに来たようだった。

ウィルは一先ず二人を部屋の中へと招き入れると、”お願い”を聞いた。

「で、なんですか？」

「えーっと、あのー、……寝れなくて」

「……は？」

「だから！……寝れないから、ウィルの部屋で一緒に寝させてもらおうかなー……？」

「……あなたは、その歳になって、まだ自立心が満足に成長していないようですね。……それで、あなたは？」

「セシルと同じです！」

「……ある意味セシルよりも酷いですね。あなたは、自分の性別をはっきりと認識していますか？」

その問いにノエルは、勿論、と答えた。

セシルはというと、自立心自立心、などとぶつぶつ呟いている。どうやら、自立心がどういうものなのか、よく分かっていないようだ。ウィルはそんな二人を叱責した後、またもや長い溜息を一つ吐く。けれどウィルは、それ以上二人を責めようとはしない。まだ続くだろうと思っていた二人は、そんなウィルの様子に拍子抜けする。

「……まあ、あなたが何故眠れないのかは、理解しています」

「……………それは、ウィルもだから？」

「あなた達のように、見つとも無く泣いたりはしませんかね」

二人は痛い所を突かれた、というふうに関を歪ませる。

部屋の灯りが、光源よりも強く二人の泣いた後の顔を照らし出していた。誰が見ても、一目瞭然なほどに。

大人になる直前の青年と、大人になってしばらく経つ女性。完全なる大人の男性から見ると、その二人はまだ幼かった。良い意味でも、悪い意味でも。それが少し、羨ましかったり、羨ましくなかったり。

自分よりも年下の王、そして上司。そんな二人を思うと眠れないのは、やはり世界の底辺から救い出して貰った恩からなのか。それとも、それ以外の感情か。

「…母親は死んだ、父親はいないも同然のあいつにとっては、私がつたった一人の肉親だから。泣いてあげないと……」

「あいつ」と”私”の位置が反対ですよ

「これで合ってる！」

「レイさんとルイチは俺の命の恩人で、それから、家族なんだ。勿論、ウイルもノエルも……。…だ、から……っ」

涙がセシルの頬を伝った。それを慌てて拭くと、必死で変な笑みを浮かべるセシル。

ウイルは、あの感情が家族に向けるものだということを、セシルの言葉で気づいた。

ルイチとノエルのように血は繋がっていない。それが、形だけの泡沫であることは分かっているが、尊い存在だということに変わりはない。

ウイルは眼鏡を掛け直すと、こう言った。

「…仕方無いですね。今晚だけですよ」

No. 9 銃と黒は遺品となった

ゆっくりと窓から差し込んでくる光。それは、朝が訪れたことを告げる。

自宅の枕と全く同じ柔らかかさのそれでは、ここが自分の家でないことがすぐには理解できない。けれど霞む視界で捉えた現在居る自室は、やけにだだっ広い。そして次に視界に入れた棚の中には、大量の拳銃。そんな非現実的な存在のお陰で、ここがどこかを思い出すことができた。

上体を起こして、その棚を再度見る。銃以外、何も入ってはいない。何挺入っているのかは不明だ。分かっていることは、銃があるのはその棚だけではないということ。そこには、拳銃ハンドガンしか入っていないのだ。

机や他の棚、クローゼットの中まで銃だらけ。元の世界でいう、小銃ライフルや機関銃マシンガン、散弾銃ショットガン、狙撃銃スナイパーライフルらしきものがある。見たこともない種類のものもあり、きつとそれはこっちの世界独自のものなのだと思う。

けれど、そんなにも大量の銃があるにも関わらず、銃弾が一つも見つからない。銃の中にも、弾は入っていないのだ。しかも薬室チャンバー、遊ポ筒ルト、自動拳銃では弾倉マガジンはある。なのに、弾は無い。

何故なのか考えようととして、止めた。この世界は非常識なことで溢れ返っている。一々考えていては、脳がいくつあっても足りない。そう思っただけ俺は銃のことを頭から消し去り、ベッドから抜け出した。

この世界に来て三日目の朝。時間が経つのが早いのか遅いのかは分

からないけれど、この状態が長く続くのが望ましくないのは明らかだ。

けど、元の世界へと戻る道はとても長そうだ。しかも零矢が王で俺がその従者。今でもややこしい状況だというのに、これ以上面倒なことになるのはごめんだ。

だからといって、これといった対処方法が無いのが今の現状。このまま、周りに流されていくしかない。少なくとも、右も左も分らない今の俺では。

そんな俺が右を横目で見やると、そこにはクローゼットがある。さつき考えていた銃、散弾銃と狙撃銃がびっしり入っている。

そんなクローゼットを、徐に開ける。昨日見た通り、銃だらけだ。

そしてそんな銃の間を、狭苦しそうに本来入っているはずの衣服が数着入っている。ワイシャツ、軍服やスーツらしきものだけで、私服は見受けられない。後は、俺が着ていた制服だ。ちなみに今着ているのは、このクローゼットに入っていた唯一の私服らしきものである、真っ黒のＴシャツとカーゴパンツらしきもの。素材とか何かもが不明なので、”らしきもの”だ。見た目は、Ｔシャツとカーゴパンツっぽい。でもカーゴパンツのデザインは、あまり現代的ではない。やっぱり、別物が……？

それにしても、カーゴパンツは結構寝心地が悪い。だからといって制服で寝るのもあれだし……。あー…、スウェットの着心地は奇跡の産物だったんだな……。

何か策を考えた方がいいかと思いつつ、目の前のクローゼットと向き合う。

そしてその中にある、真っ黒の軍服みたいな服を取り出す。その軍服は、ウィルとセシルが着ていたものの色違いだ。二人のは白だったけど、これは黒。いやいや、黒髪の俺がこんな黒の軍服（仮）なんて着たら、黒すぎるだろ！

そう思うが、これを着なければならぬ。なぜなら昨日、ウィルにこれを着てくるよう言われたんだ。

俺は少し考えた後、ワイシャツとそのズボン穿いた。そしてネクタイを締める。でも上着を着るのは止めた。

黒過ぎるといふのと、もう一つの理由で。

「あ、ルイチ。おは……」

「ああ、セシル。……？」

セシルは俺の姿を完全に視界に入れた後、何故か固まった。どこか俺の姿におかしい所があったのだろうか。

俺は、自分の身体を見してみる。見える部分では、これとおかしい点は見られない。

ちなみにここは王の執務室の前。今日は、ここに集まることになっていたのだ。王である零矢の自室はこの隣。

俺はセシルの行動を疑問に思いながらも、先に執務室に入る。そこには、もうすでにウイルがいた。

「おはようございます」

「おはよう。あのさ、セシルが何か俺の姿を見て固まったんだけど」

「あなたの姿を見て？……これといって、おかしい点は……」

「だよな？別に変なとこは無いはず」

すると、急にウィルが厳しい顔つきになる。俺もつられて、苦い表情になった。

「……………ルイチ」

「は、はい……………」

「上着は、どうしたんですか？」

思っていたことと、全く違うことを言われる。怒っているのかも思ったのだが、それは違うようだ。どちらかというと、落ち込んでる？いや、少し違うか。

72

「絶対に着てこない駄目か？」

「…できれば」

「いや、だってあれさ、黒過ぎない？俺が着ると、おかしいと思うんだけど」

「……………それでは、今はいいです」

「うん……………」

本当は、それだけの理由じゃないけど。

多分、ルイチ^{II}オルムステッドがこの服を着ていたんだろうし、それを俺が着たら二人がどう思うか気になったから、あえて着てこなかった。

でもこの分だと、失敗した？

No.10 悪役の思考は世界征服

「それで、マテリアルリリース魔力源樹木をどうやって見つけ出すつもりですか？」

寝起きの悪い低血圧な零矢が起きてきてしばらく経った頃、ウィルがそう問いかけた。

ちなみに零矢も、軍服みたいな服をきていた。けれど、俺達がきているのとは、デザインが似ているような似ていないような。

白色で軍服っぽいのだが、それでもRPGのゲームでよく見る王の服装的な感じだった。改めて俺は、零矢が王になったんだと実感する。

「それなら、もう考えてある」

零矢がニヤリと、黒い笑みを浮かべる。

うわ、これはとんでもないことを考えてるぞ、おい。多分、世界征服とか言い出すつもりだ。

どこの悪役だよ！冗談はその顔（良すぎるって意味で）だけにしろよな。

「世界征服とか言うなよ」

「んだよ、先に言うんじゃないよ」

なんだこの王。口悪すぎだろ。しかもやっぱり世界征服するつもりなんですね。

まあ、分かってたけど。零矢だったらそれくらいするだろうって。

「世界征服は世界征服でも、魔力源樹木が見つかるまでだ」

「はい！質問！なんで魔力源樹木を探すのに、世界征服？」

「ちょっと考えればすぐに分かる。木なんだからどっかの国に生えてるはずだ。だから世界征服」

「えーっと、つまり……、うん、分かんない！」

「あなたは極限まで、脳の軽量化に成功しているようですね」

「なんか、いつにも増して酷くない？」

セシルにも分かりやすく、詳しく説明するところだ。

魔力源樹木がこの世界に存在するというのは、マテリアルホルダー魔力保持者によって証明される。

そして木というくらいなのだから、地に生えているわけだ。そして、この世界でどこの国の領土でもない場所は存在しない。つまり、魔力源樹木は必ず何処かの国に生えているということになる。

何故その力を使わないのかは、色々な仮説が立てられる。

いざというときまで、とっておくため。力を使うと、何かしらデメリットがある。その国に生えていることを、何らかの理由で誰も知らない、等々。

つまり、世界征服を目指せば、いつかは魔力源樹木を見つけ出すことができると言っわけだ。

「成る程!!」

「分かったか？俺の天才的な作戦が」

「世界征服なんていうどこぞの馬鹿な悪役がしそうなことを、作戦と呼ぶなんて、どこか作戦なんだか」

はい、この言葉本当に俺が言ったと思った？んなわけない。心の中で呟いただけさ。

言ったら今頃、三途の川を渡ってつかもな。冗談抜きで。

でも世界征服って、ある意味使い古されてるっていうか、必ず世界征服しようとした奴って失敗してるんだよな。主人公含めた正義のヒーロー的存在に倒されて。王道っていえば、王道だ。

つまり、俺達もどっかの正義のヒーローぶった奴に殺されるんじゃない？

「俺の目が黒いうちは、お前達を許さない!!」的な感じで。無理やりカラコンつけたるか!

「まず初めに、休戦中のサファンから攻めようと思っただが、問題は、」

「どうやって戦争を起こすか?」

「そうだ。出来る限り、こっちから仕掛けたくない。俺達は世界征服を目指しているんだ。こっちから次々に戦争を仕掛けたら、体裁が悪いからな」

「確かにそんなことをすると、他の国と軍事同盟や条約を結ばれ、侵略が困難になる可能性がありますね」

「国民がついてこないってことも有り得る」

元の世界の歴史を見れば分かる。世界征服を目的とした戦争を仕掛けた国は、まず国民に見放され、他国の列強が同盟を結んで降伏させられている。勿論、該当しない場合もあるのだが。

この国の王は国民に人気なようだが、次々と戦争を仕掛けていけば、不満の声を洩らす民も出てくるだろう。

そういえば、この国に人権なんちゃら団体とか、そういう系統の協会はあるのだろうか。この前ちらっと聞いた、プロシットという宗教団体のことも気になる。

「そしてもう一つ。被害は最小限に食い止め、短期間で終戦にした
い。勿論、俺達の勝利が絶対条件だ」

「『ワードライト帝国と世界』で見たけど、ワードライトは世界で
もトップレベルの軍事国家…だっけ？」

「はい。その上、魔法大国ですので世界でもかなりの軍事力かと。
…ですが……」

そこでウィルの表情が曇る。何か問題でもあるのだろうか。
ワードライト帝国は、発展具合も申し分ない、と本に書いていた。
けれど何故か、セシルも暗い顔をしている。

「…前王の愚行により、パラノヴァーリ帝国との軍事力などの差が
広がってしまいました」

「前王は酷かったからね。自分の私欲のために税金を使って、政治
はほぼ放置状態。貴族がやりたい放題してたんだ」

つまり、国の発展に使う金や軍事資金を前王が使いまくったために、
国はどんどん落ちぶれていった、ってことか。

ウィルによると、その前王をレイ「ファードイナル率いる革命軍が

倒し、今に至るそうだ。

レイ＝ファードイナルによる復興のお陰で、以前よりも国の発展具合は上がったのだが、発展し続けていたパラノヴァーリ帝国や他五カ国との戦力差が広がったり、抜かれたりしてしまったとのこと。魔力源樹木を所有している可能性が高いのはそういう大国なため、世界征服は簡単なことじゃない、ということだ。

「なんだ、そんなことか」

「へ？」

「全く問題ないな。今から急速に発展させればいい話じゃねえか」

今の言葉は、何かの聞き間違いだろうか。いや、そうであってほしい。

無責任にもほどがある。第一、そんな急速に発展させられる方法があるのなら、とっくに誰かがやっている。

というかはつきり言って、何故誰も世界征服なんて馬鹿げたことを止めようとししないのか。

確か、たとえ王でも最親側近と親側近全員に反対された案件は、受け入れられないはず。ちなみにそれは、レイ＝ファードイナルが定めた法律らしい。

「あのさ、勝てる勝てないは別として…、誰も反対しないのか？」

「何にですか？」

「世界征服するっていうことに」

そんな俺の問いに、何故かウィルとセシルが顔を見合わせた。ウィルは眼鏡を指で押し上げ、セシルは顔に笑みを浮かべる。さっぱり意味が分からない。

「反対する理由が無いからです」

「あるだろ、理由なら山というほど」

「あなたの元いた世界は、よっぽど平和ボケしていたようですね」

「へ………？」

「それにしても、そっくりそのままの台詞だねー。本当に別人？」

「言っている意味が分からないんだが」

「まず、何か理由があって反対しないということは分かった。という事で、ウィルにその理由を聞いてみる。」

「反対しない理由は？」

「一つ目は、この世界が平和では無いからです」

この世界では今でも戦争をしている国がいくつもあり、いつ侵略するか、いつ侵略されるかも分からない状況らしい。

不可侵条約を結んでいるところもあるらしいが、それは上辺だけのもので、すきをつけて侵略される可能性があり、あつてないものらしい。

つまり、それほど戦争をすることに抵抗があるわけでもなく、反対にしなければ侵略される。そんな状態だそうだ。

「もう一つは、元々私達は世界征服をするつもりだったからです」

……………え？

それって、レイ＝ファードイナルとルイチ＝オルムステッドだったときから、ってことか！？

やっぱり、面倒＆ややこしい話になってきた……………。

No. 11 敵対組織は必要ですか？

「結局、教えてくんなかったし」

俺が今いるのは、城ではない。町だ。城を出て、町へ繰り出して
いる。

今の俺は茶髪で眼鏡をかけている。なんでだつて？一応俺も最親側
近なわけだし、気づかれちゃ不味い、つてウイルが言つてた。

それで、ウイルに魔法をかけられたつてわけ。眼鏡は、何の変哲も
無いただの眼鏡だ。

零矢も行きたいと言つていたが、王は狙われる可能性がある。流石
にそんな簡単に町を彷徨くわけにもいかないの、大人しく(?)
城で待機中だ。

ちなみに冒頭の言葉は、世界征服をするつもりだった、と言つたウ
イルに対して呟いたものだ。

あの後結局、何も教えてくれなかった。セシルも、こればかりは
言えない、と教えてくれない。

凄く気になるが、その内それに関してのルイチ「オルムステッドの
記憶が自分の記憶と混ざるのかと思うと、微妙な心境だ。

知りたいような、知りたくないような。実はそんなことつて、結構
あつたりする。

俺はどこに行くでもなく、町を散策していた。町は基本的に賑わつ
ていて、店の種類も豊富だ。何の店か分からない店も多々あり、好
奇心がそそられる。

日本ではあまり見られない市場もあり、これまた見たことのないも

のばかりだ。野菜なのか、果物なのか。どこに住んでいるのかも分からないような生物が、売られていたりもした。…美味しいのか？普通の人の外見は、元の世界と何ら変わり無い。だが獣人と思しき人も多々いるが、人間ベースなので獣耳や尻尾など、人間には付いていないものが付いていたりする他は、ほとんど変わらない。喋る言葉も、同じだ。

俺はできるだけ顔を隠しながら見ていたが、不審な眼を向けられることが何回かあった。それでも、髪色を見てすぐに目を逸らすのだが。

そんなふうには適当に歩いていると、何故か段々と人通りが少なくなっていく。その周辺が過疎化しているのかも思ったが、どうも違うらしい。店や家は軒並みにずらりと並んでいるのだ。しかし先に進めば進むほど、人がいなくなっていく。皆、家に引き籠もっているかのようだ。

もうほとんど人がいなくなったとき、肩を掴まれ進むのを誰かに止められた。

「おい、兄ちゃん」

「!?!」

大人なバリトンの声が、背後から聞こえてくる。急に掴まれたことよって、後ろ向きに倒れそうになるが、足で踏ん張りなんとか倒れることは避けた。

後ろを振り向くと、声に似合った姿、顔立ちの男がいた。ナイスミドル、とでも言うべきか。そんな男は、呆れ顔で此方を見ている。何故止められたのか、何故呆れられているのか、さっぱり検討もつかない。

「この先に行くつもりか？」

「まあ、そつだな」

「止めとけ。それで、此処からも離れた方がいい」

「何で？」

「お前、忘れちゃったのか？今日は、このイワーノ大通りが巡礼地だ」

「？」

巡礼地？巡礼って、何て意味だったっけ？いや、あつちの世界の巡礼の意味が分かってても駄目か。でも巡礼っていったらあつちでは、宗教関連の言葉、だったよな？悪い意味ではなかったはず。

けれどこのナイスミドルが言うには、ちょっと悪いっばいんだけど。というか、誰が巡礼するんだよ。この、イワーノ大通り、だっけか？

よく見てみると俺と男の二人以外、周りには誰もいなかった。さつ

きまでは一、三人いたのに。いやこれもう、そして誰もいなくなつた状態じゃん！

周囲を見ていた俺に気づいたのか、男も周りを見渡す。すると、俺が行こうとしていた方で男の視線が止まった。

そちらを見てみると、何やら異様な集団が此方へ向かっていた。老若男女入り混じってる集団は、ベールのようなものを頭に被っており、真つ白の服は地面を擦っている。

しかしそんなものとは比べ物にならないくらい目立つのは、眼だ。

正確には眼ではなく、それを覆う包帯や黒い布。あんなものを着けていれば、何も見えない。けれど、集団は迷うことなくしつかりとした足取りで進んでいる。何やらぶつぶつと呟きながら。

ぞくり、と寒気がした。見てはいけないものを見てしまったかのような、そんな気分。

「ちつ……。予定より少し早かったな。こっちだ！」

「え、な、なにを……！？」

強引に腕を引かれ、裏路地へと入っていく。何やら、色々と頭が混乱してきた。

あの集団を避けるために、人がいなくなっていたのは分かった。けれど、何故避けるのかが分からない。仕事を放棄してまで、避ける必要性があつた集団にあるのだろうか。

というか、そもそもあの集団は何なんだ。ウイルスからは、何も聞かされていない。……と思う。

「いつ聴いても胸糞が悪くなる詩だな」

心底嫌そうに、男は呟いた。

詩、と言ったのか？あのお経みたいに呟かれてるのが、詩？そうなのだとしたら、確かに胸糞が悪くもなるだろうけど。

「お前、なんで逃げなかったんだ？忘れてたのか？」

「えーっと……。あ、はは、忘れてたみたい……？」

どうやらあの集団のことは、この国の人達にとって知っていなければならぬ事のようにだ。

ここであの集団のことを知らないと言えば、不審に思われるかもしれない。ど忘れしていた、ということにしておこう。

「次からは、しっかり覚えとけよ？プロシットに捕まったら、何されるか分かったもんじゃねえからな」

「え……？」

プロシットって、あのいつかに聞いた敵対組織！？まあ確かに、宗教団体だとは聞いてたけど。あんな異形の集団だとは、思ってもいなかった。

それに、捕まったら何されるか分からない？それは、他人に危害を及ぼすってことか？

「なあ、実際に被害にあった人っているのか？」

「もしかしてお前、ど田舎から出てきたばっかとかか？」

「まあ、そんな感じ」

「そりゃ、数え切れないほどいるさ。死体となって出てきたやつも、そのまんま行方不明のやつも」

話によると、被害者はあの集団が巡礼をしている際、近くにいた人達らしい。

そのため今では王から一ヶ月に一度、プロシットの巡礼地とその日にちと時刻が示されたものが、家に届くらしい。

プロシットは決まった日、決まった時間に定期的に巡礼するらしく、予想することは可能なのだそうだ。

「…本当に、そんなことがあったのか……」

「ああ。多分、行方不明のやつらも、殺されてるんだろうよ」

「殺される、か」

元の世界では、殺される心配なんてほとんど無かったけど、ここでは日常なのかもしれないな。

あの安全ってというのは、あの世界とあの時代が生み出した奇跡の産物だったってわけだ。

けれど男は、尚も続けた。

「でもまあ一番酷いのは、催眠かけられて眼抉り出されて、無理やりプロシットに入れられたやつだろうな」

殺されるよりも酷いことは本当にあるって、知らなかった？

No.12 この世界は死が満ちている

「あ」

俺へと次々に紙（重要な書類）を投げつけていたウィルフレッドが、小さく声を上げた。

俺は外に行けないことが、不服なのだということを声に込める。

「あ？」

「私としたことが、ルイチにあの事を言い忘れてました」

そんな俺の声に怖気づくことなく、淡々と呟いた。

ちっ。面白くねえな。元の世界の奴らなら、これだけで凄むっていいのよ。

「言い忘れてたって、もしかして白黒ちゃん？」

「それ以外に何かありますか。それと、ややこしいのでその呼び方止めて下さい」

「なんだよ。その白黒って」

「見た目は真っ白なんだけど、中身は真っ黒だから白黒ちゃん」

「いや、由来じゃなくて」

「彼曰く、プロシットのことらしいですよ」

プロシット？あー…、なんか聞いたことあるな。宗教団体、だったっけか。

法律っぽいのがあったような……。

「あれか？法令第三十四条、プロシットを危険団体とし、活動を制限、布教を禁止する、っていう」

「そうです」

「そんなにヤバい宗教なのか？」

「危険極まりないですね」

「それで？プロシットの何を言い忘れてたんだ？」

俺は、軽い気持ちでそう聞いた。ウィルフレッドが言い忘れたと言っても、そんなに重大なことを忘れた、という感じではなかったからだ。

けれど俺の予想の範疇を、軽く飛び越えた返事が返ってきた。

「プロシットの今日の巡礼地です。遭遇してしまうと、少し大変なことになります」

「大変なことつて？」

「身の危険です」

「なにそれ」

「下手すると、死ぬ可能性もあるくらいですので」

予想外の言葉。あまりにも現実味の無い言葉だ。いや、それは元の世界のことであって、この世界では現実味があるんだろう。けれど、平和な世界で生まれ育った俺は、いまいち意味がよく分かっていなかった。でも、そんなことも言っていられない。

「死………?!」

俺はそう眩くと、部屋を飛び出した。

後ろから降りかかる制止の声を無視して。

俺の頭の中は、アイツのことでいっぱいだった。

「そろそろ行ったか」

覗き見てみると、あの奇怪な集団は遠くの方へと移動していた。小さく、白い塊が見える。

溜息を吐いて、男を見つめる。よく見ると、中々の男前だ。というかこの世界に来てから、顔立ちの良い奴にしか会っていないような……。横顔を眺めていると、男がその視線に気づいたのか、こちらを振り返った。

「……俺、お前さんのこと知ってる気がするんだけど」
「ギクッ」

そう言われて、肩が無意識に反応する。まるで、後ろから肩を叩かれた時みたいに。

そりゃ、知ってるでしょうね。この国の国民なら。どうせ従者だから、知らない人もいるのかも知れないけど、ここは王都なわけだし。大体の人が、従者でも認知していると思う。

「しかも、よく知ってるような……」

「ギクギクッ」

よく？あれ、なんだか、俺もこの人のこと、よく知ってるような気がしてきた……？気のせい？それとも……。

「もしかして……!」

「ギククーンッ!」

「ルイオル？」

「……は？」

ルイオル？ルイオルって誰だよ！少なくとも、俺じゃないことだけは確かだ。多分。あだ名とかだったら、知らないけどな。でもルイオルがあだ名っていうのも、変な話だけれども。

「じゃ、ないか……。そりゃそうだよな。髪、茶色いし」

「あー……」

ルイオルさんは髪の色、茶色じゃないってわけか。どうでもいいけど。

それにしてもこのおっさん、なんか他の奴らとは雰囲気違うよな……。どこにでも居そう、って感じじゃないっていうか。どこかで会ったような気がするし。

ふとそんな時、何故か背中に悪寒が走った。

「!?!?……」

「ん?どうした」

「いや、なんか、寒気が……」

姉貴のせいで軽く女性恐怖症な俺が、女に触ったときみたいな。又は、零矢関連の何かに巻き込まれる前の予感、とか。零矢に色々振り回されすぎて、簡単な予知が可能になってしまったんだよな。今ここに女はいないはずだから、後者?いやでも、零矢もいないはず……。

「琉璃っ！！」

ああ、なんか零矢の声の幻聴まで……。

「……つて、えっ！？零矢！？」

「どこも怪我してないな！？」

「そんなことより、なんで此处に！？てか、なんで町に来てるんだよ！」

意味が分からん！案の定、後ろのおっさんも驚いてるし！

すると零矢の後ろの方から、猫耳生やしたウィルが、走ってくるのが見えた。

うわ、これは面倒なことになるぞ。というか絶対、無理やり出てきただろ！！

No. 13 仲間外れは凸凹側近トリオ

「だから待って下さいと、何度も……」

零矢も相当だが、ウイルも運動神経がバツグンに良いようだ。息一つ乱さずに、零矢を追ってきた。

俺は普通だけど、こつちの世界の俺はどうなんだろう。とか、考えてる場合じゃないよな。うん。

ウイルは眼鏡を掛け直すと、おじさん（定着してきた）を見ると驚くことに、知り合いだったようで。

「え、オズウエルですか？」

「おー、ウイルじゃねーか。……あのさ、この状況なに？」

「私にも分かりません。それよりも、いつ此方に戻ってきたんですか？」

「ついさっきだ。他の二人も、そろそろ戻ってくると思うが」

「そうですか」

しかも、かなりの深い仲っぽい。この流れだと、俺と零矢とも知り

合いか？

「あのさ、レイのお坊ちゃんだよな？」

「そうですね」

あ、レイのお坊ちゃんはスルーですか。定着してんのかなー？
でもやっぱり、名前で呼ぶくらいだし深い関係っぽそう。しかも、
王を名前呼びだし。

「んで、ルイチ、って言ったよな？」

「そうだけど」

おじさんが、こっちを見てくる。その表情に、ちよつと身構える。
嫌な予感がする、とでも顔に書いてあるような表情だった。

「さっき、ルイオルかって聞いたとき、違つって言ったよな？」

「うん、うん」

あ、やっぱりあだ名だったか……？

いやいや、俺に非は無いから！そんなに睨んでくんないよ、ウィル！！

「しかも、プロシット関連のこと詳しくなかったし……」

ど田舎出身だったやつだ……。あーあ、変なこと聞かなきゃよかった。

ウィルが溜息を吐いてから指を鳴らすと、俺の視界を彷徨っていた前髪が茶色から黒色に変わる。否、戻った。

それを見たおじさんの表情が、疑惑から確信に変わる。

「やっぱり、ルイチ……。でも、別人？いや、そんなはずはない、よな？」

「言っておくが、俺はお前のことを知らないからな」

急に、零矢がそう言い出した。

まあ、事実だけど！ちょっとは、空気よもうよ！曲がりなりにも、日本人だろ！？

「それって……」

「今、説明するのは面倒です。他二人が揃った後、城で詳しく説明します」

「…あのさ、ウィル。俺達と、あのおっさ……男の人の関係ってなに？」

もう零矢がばらしてしまったので、躊躇することなくウィルにそう聞いた。はっきり言って、さっきから凄く気になってた。しかも城で説明する？もしかして、もしかしなくても……。

「彼は、オズウェル^{キツ}シンジャー。側近^{エイド}の一人です」

「ただいまあー!!」

扉を勢いよく開いて執務室に入ってきたのは、15、16歳くらいの少女。セシルとは反対の、黄色っぽい金髪を高い位置で二つに結い、ツインテールにしている。そんな髪を揺らしながら、大声で挨拶をした。

けれど、いつもなら返ってくるはずの声が無い。

「あつれ？」

誰もいないのかと思い、彼女は部屋を見渡す。すると、比較的早い段階で、一人の人物を発見した。

薄い水色の髪は、肩よりも少し上くらいの長さで、彼女に背を向けて立っている長身の男。ズボンという点を除いては、彼女と全く同じデザインの軍服のような何かを着ていることから、同じ役職だということ分かる。

「ちょっとー、ウォルター。居たなら、返事してよ」

「……………」

その彼女の声で、彼はゆっくりと振り返った。紅い瞳が、彼女を捉える。しかし、それは左眼だけであり、右眼は黒い眼帯に覆われて

いる。彼は何も言葉を発さず、ただ無表情で彼女を見ている。

「って、言っても無駄かね？」

彼女の言葉に、彼はゆっくりと頷いた。

No. 14 信憑性が薄れる理由は「慣れ」

現在、あの裏路地から大急ぎで城に戻ってきたところ。

王が普通に街中を走ってきて、よく誰にも見つからなかったな、って感じた。そのため、帰りは人通りの少ない道を猛スピードで帰ってきた。

「ちゃんと、俺達にも説明しろよ」

「分かっています。他の二人が戻ってきたら……」

そう言いつつ、ウィルが執務室の扉を開ける。

そんな執務室の中は、予想外な光景が広がっていた。ツインテール女子が眼帯男子を追い掛け回しているという光景だ。しかも、鋭利な刃物のようなものを持っている。そのせいなのかは分からないが、部屋は見るも無残にひっくり返っていた。

「なにが、”ルイチとの約束”よ！喋りなさい、よっっ！！」

そう言うてから、投げられるナイフ。そのナイフは、男の心臓目掛

けて一直線に飛んでいくが、男は軽くかわすと、首を横に振った。それを見て怒りの度合いが増したのか、女は見るからに顔を歪ませる。

「へえ〜…、それが仲間に対する態度ですかぁ……。そうですかぁ
……………」

ベルトに付いてるホルダーから、新たに何かを取り出す。光が反射するそれは、先程と同じ刃物だということが分かる。よく見ると、細やかな装飾が施された鍔だった。持ち手の所が綺麗な黄金で、刃の部分はよく磨がれているのか、銀色に光って先端は鋭く尖っている。少し当たっただけでも、皮を裂いて血管に行き届きそうなほどには。

何故鍔をここで取り出すのか、意味が分からなかったが、それを見るとウィルが顔色を変えて叫んだ。

「ノアっっ!!」

「え……………!?!」

「……………」

女も同様に顔色を変える。ウィルはすぐに、呆れたような表情になった。男は相変わらざる無表情&無口……？

「……………！ルイチさん!？」

「うゝえ!？」

此方を見たかと思うと急に喋った男。そのせいで、変な声が出てしまった。声が出なくて喋れなかった、とかではなかったようだ。声も普通の、容姿に似合ったイケメン声……………、ちっ。

「生きてたんですね……………！良かった……………!！」

「えー…、ルイチ生きてたのかぁー……………。…って、レイ様!？」

零矢に視線が行くと俺を強引に横へ押しやって、零矢に駆け寄る女。うわー、超ムカツクデスケド。零矢共々、屠って地に還したい……………。まあ、できないただの戯言だけ。

…一先ずはこっちの、青髪美形男子からだな。くっそー、なんでこんなに美形ばっかなんだ!!さっきの女も、上の上くらいの美女だったし!

「どうしたんですか？もしかして、怪我を……」

「い、いや、それは、ないから……。だいじょぶだいじょぶ」

俺の精神と頭がだいじょぶじゃない！！えーっと、一先ずこやつは側近なんだよな？いやいや、自問自答しても意味がない。

そして、ルイチ＝オルムステッドとは、かなり深い交流ありっぽい。あと、好意を全面的に押し出してくれてるので、仲はそれなりに良好そうだけど。

そして俺は、こいつについての記憶がさっぱりない。が、なんか知ってるかもー、って感じはする。腹の中で、こいつの情報が燻ってる感じ。うん、キモい。

そして、あっちのピンクのツインテについては、考えたくない。険悪な関係なのが、分かったので。

今も、零矢にピンクのハートを飛び散らせてやがる。あー、いやだいやだ。でもなんでだろ、凄く懐かしい光景のような……。

あっちの世界で、零矢がキヤーキヤー言われてたからか？まだ三日くらいしかたってないんだけど。

結構頭を振り絞ってみたけど、考えても仕方がないし、事態の改善には繋がらないので、ウィルに助けを求めてみたりする。

「ウィル、説明ー」

「……この人達には、できる限り説明したくないのですが」

「んなこと言ったってよ、じゃあどうすんの？って、話だし」

「それでは、あなたがして下さい」

「説明できるほどには、理解してないから」

俺は、大体分かったというノリなのだ。完全に分かるうとする、話の次元が違いすぎて（本当に違うのかもしれないが）頭が沸騰しそうになる。

それに、説明したくない、とはどういうことだ。しかも、この人達には？もしかして、凄く物分りが悪いとか？

「それなら、俺から話そうか？」

そう言ったのは、今まで黙ってコトの経緯を見ていたおじさん、基、オズウエル、キッシンジャー。中々にイカした名前だ。おっと、死語か？

「俺にまず説明してくれたら、俺からあいつらに説明すつから」

「それは、一向に構いませんが……。大丈夫ですか？」

ウィルの言い方だと、オズウエル（おじさんはちょっと可哀想なので）が損な役回りをするみたいだ。ウィルが嫌がっていたので、損な役回りなのは確かなのだが。

「少しの不安はあるが、まあ大丈夫だろう。あいつらは子供だが、それは子供ぶってるだけだ」

「思春期に傷を負うと、一生引き摺る可能性もあるぞ」

例の一人が、この俺だ。軽度の女性恐怖症になったのも、思春期という敏感な時期にも関わらず、姉貴が頭のネジを一本どころか十本くらい落としていたからだ。皆までは言わせるな。否、言いたくない。

「お、急に出てきたねー。大丈夫さ。とっくにすぎてる」

「一人は真っ只中に見えるけどな」

「……大丈夫だ」

大丈夫大丈夫言っていると、大丈夫の信憑性が薄れるぞ？

No.15 青への理由無き罪悪感

ウィルがオズウェルにこの経緯を話すと、しばらくは困惑していたが、流石は年長者。すぐに、あの二人にどう伝えるべきか、考え始めた。

そして俺は今、青い髪の青年との会話に檻褻がでないかと、冷や冷やしているところだ。

「ルイチさん。今までどこに？行方不明だと、聞いていましたが」

「え、えーっとそのへんは後でおっさ……、オズウェルが話してくれるから」

「そうですか」

「……何で、とか、聞かないのか？」

「込み合った理由があるようですし、結果的に話して頂けるのなら、構いません」

か、神だ……。いつも巻き込まれ、嫌なことを背負う側だった俺にとっては、この青年が神に思えてくる……！！

切実に名前を聞きたいところだが、今聞いてしまうとパニックになるから、今は駄目だ。

……零矢が上手くやっていることを祈る。

「レイ様レイ様！私、敵殺戮記録を更新したんですよー！！なーんと！この前の戦争で、1104人も殺つたんですよー！まあ、レイ様には遠く及びませんけどっ」

「……………」

「レイ様？どうかされましたか？…………はっ！もしや、お疲れですかあー！？」

「…まあ、そんなところだ……………」

お、耐えてる耐えてる。って感じで見てたら、なんか睨まれた。

というか、あのツインテ女子、可愛い見た目のくせしてえぐいこと言ってるなー。細かい人数まで覚えすぎだろ。

この前の戦争っていうのは、あれか？今は休戦中の、サファン王国との戦争。それで思い出したけど、まだその件が片付いてなかったのか。

「おい、お前ら」

部屋の隅で難しい顔をしていたオズウェルが、深刻な顔と声で二人を呼んだ。ついに、話すのだろう。

女は嫌な顔をしながら、男は無表情でオズウェルの所へ向かった。なんとなく嫌な予感がして、俺は違うことを考えようと、無理やり何か話題を考えた。部屋を見渡したところで、一人の人物が部屋に入ったときからいないことに気づく。

「…………あれ、セシルは？」

思わず漏らした呟き。その呟きが聞こえたのはウィルだけのようで、ウィルもまた疑問を口にする。

「そういえば、いませんね。いつもは喧しく吼えてるはずなんですが」

「なんかウィルってさ、誰にでもちよっと棘があるけど、セシルには棘ってというか針だよな」

「何がですか？」

「べっつに〜？」

まあ今は何かを話し合うわけでもないから、いなくても構わないんだけど。多分、自室にいるだろうし。

そこまで考えたとき、トン、という音が聞こえた。大きな音ではなかったが、異質な音だった。硬い何かに、鋭い刃物が滑らかに刺さったときのような……。

その音がした方向を見てみると、壁に深々とナイフが刺さっていた。その一センチ横を見れば、オズウエルの顔。しかもそのナイフには、見覚えがある。

「ふざけないでっ!!」

「ふざけてなんかいない。全て、本当のことだ」

「そんなこと、あるわけない!だって、レイ様はそこにいるもん!」

あー、説明し終えたのか。ちょっとぶりっ子言葉も、様になる奴は様になるんだなー、とか場違いなことを考えてみる。

こういう時こそ、ウィルの出番だろ。そう思ってウィルを見るが、肩を竦めるだけ。うん、様になる。

じゃなくてっ!あなたが傍観者になってしまったら、一体全体誰が止めるというのですか!?!この暴走娘を!

そこでまた、先程の音。壁に刺さっているナイフが、一本増えていた。

「レイ様！レイ様は此処にいますよね！？私の目の前に！」

「…ああ、いるんだろうな」

「それじゃあ……！」

あっさりと、肯定の言葉を述べる零矢。

出鱈目なことを言うな、と諭そうと思ったが、零矢は言葉を続ける。

「俺の中に」

「え……？」

女は一步後ずさる。絶望の色を、瞳に宿しながら。

そして、ふらふらとした足取りのまま男に近づくと、男に掴みかかった。

「ねえ……！あんたも何か言ったらどうなの……！」

「……」

「律儀に約束守ってるけどさ！その約束した相手が、もういないかもしれないんだよ！？消えてるかも……、消えるかも、しれない、んだ……」

よ、と掠れた声で言って、男から手を離す。男はそれを見ると、此方を向く。目が合うと、何故だか罪悪感が襲って、居た堪れなくなつた。

それでも、目は離さない。

「俺は、あなたの言う言葉は信じます。約束、ですから」

「……その約束した相手が、俺じゃなくても？」

「……それが答え……、ですか……」

そう言うと男は、目を伏せる。女のように取り乱したりはしなかったが、相前にショックだというのは、痛いほどに伝わってきた。場に、言い表しようのない雰囲気が付き纏う。そして、僅かな泣き声。

ウィルが話したからない気持ちだが、よく分かった。

No.16 雰囲気転換は二人の介入者によって

彼女は泣きながら、荒々しく執務室を出て行った。多分、自室に戻ったんだろう。

そして気づいたときには、あの青年もこの場から消えていた。自己主張の少ない男だ。

その後、入れ替わるようにセシルが執務室に入ってきた。そして何故か、ノエルも一緒に。

「あつれ？戻ってたんだ。お！おじさんも戻ってるー！」

「何日かぶり〜」

「よっ。久しぶり……って、そんなに久しぶりでもないか」

「相も変わらずの能天気馬鹿ですね」

今だけ、ウィルの言う事に頷ける。それほど、この場の空気は重たいものだったのだが。

セシルはそんなこと、微塵も感じていないかのように振舞っている。姉貴はよく分からないけど。

いつの時代も、どこの世界でも姉貴のことはさっぱりだ。

「なんで急にそんなこと言われたのか、さっぱりなんだけど」

「うんうん」

「察せよ」

零矢がそう言う。零矢に言われても、セシルは頭に疑問符を浮かべるばかり。姉貴はよく分からない表情をするばかり。話が進まないなので、自分から話し話題を転換させた。

「あのさー、さっきの二人って誰？」

「え、なになに？何の話っ！？」

「説明するのが面倒なので、黙っていてもらえますか？」

「私達だけ仲間外れ！？」

「さっきの二人は、先程も言った通り側近サイドです。見た目女の方が、ノア^{II}エインスワース。青い髪の男は、ウォルター^{II}ブルーノです」

「はい、無視っつ！私もう、吃驚！び・つ・く・り！！」

「煩いですよ」

姉の意味不明な行動は、正直言ってお腹いっぱいだ。そして何よりも気になるのが、ウィルの言葉。何か、ウィルの言葉の中で引つ掛かる言葉があるような……。

> さっきの二人は、先程も言ったように側近エイドですく

別に、引つ掛かる言葉はないよな……？

> 見た目女の方が、ノア「エインスワースく

ん……？何か、変だよな、この言葉。見た目女の方が……？……！
？”見た目”女の方が……！？

そう思いついて、ウィルに聞こうとするが、零矢に一步先を越される。

やっぱり思いつくまでのスピードが、零矢の方が速いか……。

”見た目”女って、どういう意味だ？”

「そのままの意味ですよ」

「ああ、そうか。知らないのか」

「え、何が何が？」

「ああ！あの萌えっ子女装男子、男の娘のことか……！」

おそらく核心をついているのであろう姉の言葉は、一先ず聞か
なかつたことにする。

人類が足を踏み入れてはいけない領域だと思っからだ。

「つまりノアは、男だってことだ」

「え……?…ついでなのか?」

「ああ。ついでる」

俺とおじさんが真面目に真顔で話していると、何故か零矢とウイルに
は睨まれるし、姉貴にはニヤニヤと変な笑みでこつちを見られた。
え、なに?俺何か、言っちゃあいけないこと言いました!?
という感じで姉貴を見ると、何故かガツポーズであまり教育上よ
ろしくないことを言われた。

「オジサンって、攻めもいいけど、やっぱり受けもいいよね!オジ
サン受け、h u u u u!」

「ぎゃあああああ!そんな台詞で締め括んじゃねえええええ!
」!

No.17 眞実は嘔吐き青色青年

「あゝゝゝ、もう！ほんとに、俺はこういうの苦手なんだって！」

俺は扉の前で、軽くパニック状態。

その扉は、青髪青年 ウォルターの部屋の扉だ。

俺がここいる理由は、一言で言うとウィルのせい。

しかし、ウィルが言わなかったとしても、いつかは解決しなければいけない問題。話し合い、という名の。

けれど、俺はこういうことに弱い。はっきり言って、苦手だ。人を言い包めたりするのは、零矢の専門だ。

それでは零矢がやればいい、という文句は今回も言うことができな。しかし今回は理不尽なものではなく、正確な理由がある。

零矢は零矢で、話し合いをしなければいけない相手がいるからだ。

それは誰か。この流れからいくと、一人しかない。ノアという、金髪”少年”。

それにしても、あれはどこからどう見ても女だったんだけど。零矢にぞっこんらぶ、だったみたいだし？

じっくり見れば、男な部分があつたりするのかも。

「って、なに現実逃避してんだよ、俺」

深呼吸を一つして、眼を強く瞑る。

「……………よし」

いざ、話し合いに臨もうと、扉をノックしようとする。

が、その時、突然扉が開いた。

「いっ！っ！っ！？」

鈍い音がして、鼻頭に扉が勢いよく叩きつけられた。
思わず、鼻を押さえてしゃがみ込む。
呻ったり、悶えたりしていると、頭上から声が降ってきた。

「ルイチさん？」

「っ……………」

扉が開いた原因は、勿論自然現象などではない。部屋の持ち主であるウォルターが、内側から開けたのだ。扉の前に人がいるなどと想像することは、まずないだろう。それなのに、扉をそーっと、ゆっくり開ける人なんて、ほとんどいないはず。つまり、結構な衝撃が加わったというわけだ。しかしこの時、物理的な衝撃以外の衝撃が襲った。

謝罪の声と共に、手が下りてくる。

「すみません。いるとは思わず……」

「あ、え、えーっと……、どうも？」

疑問符を文末にくっ付けながら、ありがたく手を掴ませていただく。しかしそれにしても、何故彼は……。

「ここにいたということは、俺になにか用でも？」

「お、おー。ちょーっと、話したいな、と」

何故か、口籠ってしまふ。本当に俺は、こつこつうのに向いていない。彼は疑問そうな顔をしながらも、部屋に招き入れてくれた。

「それで、何の話を？」

俺とウォルターは向かい合って、ソファアに座る。そう切り出されるが、はつきり言って、何を話せばいいのか全く分からない。

なのでまず、思いついたことを口に出した。

「あー……、…髪伸びた？」

「は？」

あゝ ああああ！！俺の馬鹿！ばーかつ！！
つーか俺、この人のスタンダードな髪型知らないし！もしかしたら、これがスタンダードなのかも知れないし！
どうすんのさ、俺！！

「ああ、はい。随分、戦場にいたので」

「だ、だよなー！」

何が、だよなー！だよっ！前の髪型知らないのにさ！

再び訪れる、気まずい沈黙。

どうやって切り出そう、何を言おう、などと迷って、あーうー言っていると、彼が口を開けた。

「あなたがここに来た理由は、俺がどう思っているのかを聞きに来た。違いますか？」

「あ、あ、まあ…、そうなる、かな？」

「そうでしたら、俺は大丈夫ですよ。割り切れないほど、子供ではないので」

「……………」

しっかりとした口調、不自然など欠片もない表情。

きっと本当なのだろう。そう一瞬思っ、安心しそうになった時、

俺の表情は突然固まる。

固まって、動かない。別に、何かが起こったわけでも、変化したわけでもない。

何かが起こったのは、俺の中。

” 違うだろ。そうじゃない ”

俺に、そう言われる。いや、分からない。 ” 俺 ” なのかも知れないし、 ” ルイチ ” なのかも知れない。

けれど、 ” 誰か ” に言われたのは確かだ。全身を、その言葉が駆け巡る。

何が違うくて、何がそうじゃないのか。明確だ。それを俺は、百億年前から知っていたかのように。

「 嘔吐き 」

「 !? 」

乱雑に立ち上がる。

なんだか無性にイラつく。理由の無いイラつき。きっと俺ではなく、ルイチがイラついているんだ。

ふと眼に入った、机の上に置かれているナイフを引っ掴む。

いつもの俺なら、何故こんな危ない物を机の上に置いてあるんだ、とか思うのだろうが、今はそんなこと関係無い。

「何を……」

「認めたくないんだろ？」

ナイフを、無理やりウォルターの掌に握らせる。
そのまま切先を、俺の喉に当てた。

「やめ……!!」

「それなら、殺したらどう?」

「っ……」

「俺の存在を消したいんだろ？」

「……る」

「子供じゃないとか言っつて、”約束”破って!それほど嫌なら殺せよ!!ルイチが未だ存在している、この身体を!!」

「やめろっつ!!」

まるで操られたように、初対面にも近い青年に怒鳴っていた。流れ出るように。止められなければ、止めようとも思わない。俺も同じ気持ちだと言わんばかりに。

なのに、言っている意味が分からない部分だらけ。

俺は、ルイチの片鱗を感じた。同時に、”約束”というものを理解した。

それは二人の間に発生する、絶対的な掟。絶対的な容。絶対的な信頼。

見ると彼は、酷く泣きそうな顔をしていた。

「お願いだから……、ルイチさんと同じあなたが、そんなこと……、言わないで……」

痛い。どこかが。

そんな顔をしないでほしい、なんて、俺が言っているいい台詞じゃないよな？

ナイフの落ちる音がする。

手持ち無沙汰になった手。どうしようかと彷徨わせっていると、勝手に動いた。

柔らかい、青色の髪に。

「……………」

「お、俺じゃない！ルイチが……………！！」

顔を赤くしながら変な言い訳をする。癖になりそうな感触。

そんな言い訳を耳にすると、ウォルターはとびきり綺麗な微笑を浮かべる。零矢に負けず劣らずの。

見ているこっちが恥ずかしくなりそうなそれを見て、勢いよく立ち上がる。

「じゃ、じゃあ、そ、そ、そういうことだからっっ！！」

そう言い残して、逃げるように部屋を出た。

多分赤い顔は、誤魔化せていなかっただろう。

「……………ルイチさんと同じく、変な人だ」

認めてくれなくてもいい。
好いてくれなくてもいい。
嫌ってくれても構わない。
敵だと思っても構わない。

だけど、どうかお願いだから、

嘘は吐かないで。
信頼してほしい。

つまり、約束は守れ。

No.18 転がり込んだ再戦口実(前書き)

サファン戦突入!

No.18 転がり込んだ再戦口実

瞼をそつと下ろす。

グリップ
銃把を握り直し、
セイフティ
安全装置を外す。

息を呑む。

銃把を強く握る。

そして、

トリガー
引き金を引いた。

直後、耳を劈くような爆音が轟く。

余韻で手が痺れる。

思わず顔を顰めた。

「…っはあ……」

一発撃つだけで襲い来る、疲労感と脱力感。

普通の銃を撃つときには必要のない神経や技法、能力を使わなければ、この銃は撃てない。

やっと、弾が無い理由が分かった。

この国にある銃は、全て魔銃と呼ばれるものなのだ。
使い手の魔力を弾丸にして発砲する。

メリットは、弾の威力や速さが自由自在である（けれど銃の種類に左右される）ことと、装填操作をする必要がないこと。

デメリットは、撃てば撃つほど魔力が削られていくこと。魔力＝体力みたいな感じらしい。

ちなみに、威力が高ければ高いほど、速ければ速いほど、削られる魔力の量は多くなる。

「でもまだ、魔力の籠め加減とかを上手くコントロールできないんだよなあ……」

そこでやっと、瞼を上げる。

目標であるのだと真ん中には、大きな穴ができていた。それは少々、予想していたよりも大きなもので。

けれど、狙った場所に一寸の狂いも無く命中しているのは、やはり天性の才能というのか。

当たり前だが、俺は魔銃を撃つことができるので、マテリアルホルダー魔力保持者だ。そのことは一週間程前に確認済みだ。勿論、零矢も同じく。

「っあゝ あゝゝゝゝ！ …… 疲れた……。休憩しよ、休憩」

俺は地下にある訓練所から、執務室へと向かうことにした。

「…………おっ？」

気分転換に来た執務室には、何やら深刻そうな面持ちの零矢がいた。

「どうしたんだ？零矢」

「ああ…、琉壱か…………」

「…なんか、イラっとくる言い草だな」

零矢がいては休憩になりそうもなかったので、自室に行こうかと思つたとき、机の上に広がった地図が目に入る。しかも、無数の書類や本が無造作に置かれている。

零矢はそれを、睨みつけるように見ている。どうやら地図は、世界地図のようだ。

この世界の地図を見たことがなかったので、ついつい視線がそちらにいつてしまう。

この国が世界のどの位置にあるのかさえ知らないのだ。隣国などはこの前覚えさせられたので知っているが。

見ると、赤い丸で囲まれている所が二箇所ある。

一つは、『ワードライト』。もう一つは、『サファン』と、いう文字が丸の中に書かれている。

つまり、ここがワードライト帝国か。地図でいうと、結構上にある。そして、その左隣にサファン王国があるようだ。

資料には、ワードライトとサファンの情勢や国状、国境付近の様子、地形、休戦条約の内容などが記されている。

本の方は、サファンの国状が事細かに書いてあるようだ。

「…もしかして、どうやって戦争を起こそうか、考えてたり……？」

「そうだ」

素っ気無くそう答える零矢。俺はあまり、気乗りしなかった。
なぜなら、戦争が起これば絶対に、俺の意思は関係無しに巻き込まれる。

実のところは御免被りたいのだが、それが無理だということは既に分かりきったことだ。

「……………で？何か良い案でも思いついた？」

「大まかには、な」

やはり天才にはこんな壁、発泡スチロールでできているのと同じよ
うだ。

「へえ……………」

「けど、一つ問題があるけどな」

「ふーん……………。どついう案なわけ？」

「簡単に言えば、国境付近で爆弾事件を起こして、その罪を向こう
に擦り付ける」

「……………」

これまたエグい作戦を立てたもんだ。

でもそれだと、色々と問題があるような気がしないでもないが。

「…でもそれだと、確実な証拠があるんじゃない？向こうがやった、っていうさ」

「それが唯一の問題」

「唯一って……。爆弾事件なんだろう？周辺に被害が出るじゃん」

「それは大丈夫だ。周辺に町がない国境で起こす」

「けどさ、それって向こうがそんな爆弾事件を起こすメリットが無いような……………」

「それも問題ねえよ。町がすぐ近くにある国境付近で、不発弾が見つかったことにする」

「……………」

つまり、爆発させる方は、実際に爆弾事件を起こした、という筋書

きを得るため。

不発弾の方は、向こうがそんな事件を起こすメリットを裏付けるため、ということだ。

けれどそれだけでは、向こうがやったという決定的な証拠にはならない。

爆弾をサファン製のものを使うとしても、それだと反対に此方が向こう側が起こしたように見せかけるため、ということになってしまいかねない。

確実なものが必要だ。

例えば、サファンのスパイがここに潜り込んでいて、そいつを捕まえた挙句、そいつのせいにするとか。

そこまで考えた時、突然執務室の扉が乱雑に開いた。

「レイ様っつ!!」

ツインテールにした髪を揺らしながら入ってきたのは、美少女、ではなく美少年のノア。

零矢がどんな話をしたのかは知らないが、機嫌を直したようであった直後と同じように、零矢にぞっこんらぶなようだ。

「なんだ？」

「報告します！兵の中に、サファンの密偵が入り込んでいたようで……」

「……………」

俺と零矢は、思わずお互いの顔を見合わせた。だつて、こんな都合よく混ざってるなんて……。

零矢は口角を上げ、目を僅かに細めると、

「これはこれは……。美味そうな餌が混じっていたもんだな」

悪魔も思わず逃げ出しそうな声音で、そんな台詞を吐いた。

No.19 重い心と凶器と名前

重い。

何もかもが重い。

この状況も、心も、爆弾も。

そんなもの、見たことさえなかったのに。
今俺は、手袋という布一枚隔てただけで、それを持っている。

俺の手には余る凶器だ。

そして、ただの知識であるはずの、それを使う方法。
けれどももうすぐ、知識だけではなくなる。

身体が、覚える。

怖くはない。でも、なんだか重い。
重くて重くて、身体も心も、何もかもが潰れてしまいそうだ。

気が滅入る？不安？緊張？

いせ、せつぱり、怖いのかもしれない。

「ルイチ？」

「あ……でっ!!」

木に思い切りぶつかった。
は、鼻が……!!

「おいおい……。大丈夫か？」

「いって、え……」

呆れ気味にそう声をかけてくるのは、おっ……オズウェル。

今回の仕事を押し付けられたもう一人だ。

「だ、だいじよばないけど、大丈夫」

と言って、ぶつかった木を睨みつける。

その木は、見たこともない純白の花を咲かせていた。

例えるなら、蓮のような。

「……まあ、考え事をしちまうのは、分からないでもないがな」

「とか言って、こづいづのには慣れっこなくせに」

「なんでそう思っつ？」

「……おっさんだから」

ていうのは、違うけど。

この国の歴史を基に考えても、オズウエルの地位を考えても、慣れなければいけない状況下にいたのは間違いない。

つい最近まで戦争していたんだし。革命とかあったんだし。

オズウエルが、どっち側だったのかは知らないけど。

後は……、勘？

「あのなあ……。俺はまだ、三十代だつっの！」

「でも、俺の倍くらい人生経験はあるよな？」

「……さあな」

子供のように、そっぽを向いてしまった。

変なところで子供っぽいなあ……。

もしかして、触れちゃいけないワード？

「……あ、ほら、あそこだ、ルイチ」

目的地、つまりはこの凶器を使用する場所に着いたようだ。
しかし、その前に俺は、ずっと疑問に思っていたことを口にする。

「……あのぞ、」

「うん？」

「なんで俺のこと、ルイチって呼んでるんだ？」

「は……？」

意味が分からない、というような顔をされた。

いや、意味が分からないのはこっちの方なただけど。

「てつきり、”ルイオル”って呼んでんだと……」

「ああ……、あれはお前が…じゃない、”ルイチ”が嫌がるから止めたんだ」

「ふーん」

最初はルイオルって呼んでたけど、嫌がられたから止めた、ってこと？

てか、ネーミングセンスが可笑しすぎる……。
そりゃ、嫌がるだろうな。

「なんだ？そう呼んでほしいのか？」

「冗談。絶対に嫌だ」

「なんで嫌がるかなあ……………」

嫌がる理由の一つは、さっき言った通り、ネーミングセンスが無いからだ。

それともう一つ。

「……………このルイチとは、絶対に理由が違うと思っけど」

「？」

「俺が嫌なのは、”オルムステッド”じゃないから」

「……………、……………！！！」

何かに気づいたと言わんばかりに、オズウェルは目を見開く。

「それだ……………！」

「なにが」

「あいつも、”オルムステッド”って呼ばれるのが、嫌だったんだ

……」

「は？」

意味分かん。

けれどその時にはもう、あの不快な重さは消えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3710t/>

紅の偽王と黒の偽従者

2011年10月4日17時59分発行